

長 征

1971.6 第2号



日本マルクス・レーニン主義者同盟
労働者組織委員会

目次

1. 全国に無数の「工作者グループ」をつくりだそう //	2
日本マルクス・レーニン主義者同盟 労働者組織委員会	
2. 闘争の教訓	
イ 春闘座談会	5
ロ 港湾労働者	22
ハ 寄稿 日本教育新聞労働組合	33
民間中小労働者	40
ニ 沖繩闘争労働者共闘会議の闘い	47
ホ 五・三集会の報告	81
ヘ 映画「水俣」を見て	84

全国に無数の「工作者グループ」をつくりだそう

日本マルクス・レーニン主義者同盟

労働者組織委員会

1 「党の革命」を人民大衆とともに!

七〇年代、新左翼は「党の革命」の時代である。これを完了するには長い年月が必要である。もちろん実践しつつやり通すが、その実践も従来のやり方を変えなければならぬ。完了時には、人民大衆との結びつき (○肉休労働に従事する労働者、○基地闘争を闘う生産者農民、○大企業の海洋廃棄により生活手段を失なわれようとしている漁民、公害により肉休をむじばまれた住民、○在日、中国人、朝鮮人のなかの肉休労働者、そして、在日、中国人に加えられた入管体制による弾圧から彼等の基本的権利をかちとるたたいを支援し、部落民に加えられたさまざまな差別を共に糾弾をする、更に沖繩人民と真に連帯する闘いを追求するなかで日本プロレタリアートの思想と行動を一步一步創り出す) Ⅱと建軍の質をもった前衛党が創り出されなくてはならない。

われわれの六〇年代は、労働大衆が充分に立ちあがり、ともに敵と闘うまでにはいたらなかった。われわれは整理しなければならぬ。革命運動に「中間潮流」が運動へのステップとなりえなくなってきたことを。「中間潮流」の新左翼が、社民の道に屈服しつつ、展望を見出せなくなっている。それは、八派及び革マルの大衆との強固な結びつきと軍事への不徹底さがそうして、大衆との極端なまでの結びつきと軍事への不徹底さがつきまとう「中間潮流」に夢はない。いつもやることに、大言壮語と理屈がまかり通る。党派への困いこみ、引き回し、内ゲバである。いったいわれわれの「安保、沖繩」政策の指導によって三里塚、北富士や沖繩全軍労働の闘いが生まれたのか、またそれらの人民に対する政策を持っているのか、そんな所から前衛党などは決して生まれてこないだろうし、信用もされないだろう。

われわれは、八派そして武装蜂起三派や全国に散在するノンセクトの諸君と、人民内部の矛盾を正しく処理する方法をとり続けたい。

われわれは、八派のワクからはみだし、ミニコミ版雑誌を出し、自立的な運動を進めている諸君を支持する。「中間潮流」

とは違った方向を持って運動を進めている。

われわれは、全国に「工作者グループ」を創り、「下」からの大衆との結びつきを強める方法をとる。例えば、職場と住居が一緒になっている地域での行政闘争、要求闘争の中にある矛盾の原因と闘争の過程での階級的自覚の成長と大衆闘争機関の自主的な運動創りであるとか、職場での資本との持久的な闘い、つまり労働運動を進めるとか、基地周辺での住民闘争、公害、物価等々何でもあつて。

「党の革命」を人民大衆とともに! とは、思いきって強固に大衆との結びつきを進める中で、人民大衆とともに実践を通じた理論、思想をともにかちとる長期の闘いのことである。「大衆路線」を実践し抜くことである。まだ抽象的なのは実践が不足しているからである。もし現在、われわれに原則があるとすれば、「大衆の先頭で闘う」以外にない。

「六月決戦」「七、七華青闘告発」「海老原君虐殺事件」等々の欠陥を知りつくし、大衆と結びつこう! それも不徹底であつてはならない、思いきって大胆に!

七〇年代の人民は、アジアに沖繩に三里塚に北富士に、そして全共闘、反戦から出てきた人民に、長期の労働運動、住民運動を進めている人民の中にある。

地域、職場を主とし、カンパニア集会を従とする闘いになる。

沖繩闘争も地域、職場での具体的な闘いに役立ち、真に沖繩人民に連帯するものでなくてはならない。その特色は、地域、職場での沖繩闘争の具体的な活学活用の中とか、富村氏支援闘争や山谷反戦の人達の闘いに見られる。例えば、三里塚や北富士の人達は、自からの持場で闘い、沖繩人民に連帯している。けっして「首都をコザ暴動にせよ!」とかの一発のカンパニア集会に連帯があるとは思えない。

地域、職場で人民大衆とともに機関誌や会議をもうけて、自力更生と人民大衆との結びつきを強める作風をうちたてよう! われわれの整風も「誰々を支持するとか、しない」とかの話をやめて、整風で得られた思想傾向と自前の実践を結合し、人民大衆とともに「党の革命」をやりぬこう!

現実から出発し、実践の中で理論、思想を見出す、その過程にある人民大衆との結びつきの教訓が生かされているのかい

斗争の教訓



↑ 5・3集会後のデモンストレーション

↓ 沖縄闘争労働者共闘会議の政治集会



2 「長征」を全国労働者の教訓交流誌へ！

六〇年代の闘いの成果と欠陥を知っていなければ次に進めない。われわれが進めるかどうかは、成果と欠陥を知りつくしているかどうかにかかっている。もし進めなかったなら、又違った方法もある。

全国の地域、職場での「工作者グループ」が、どれだけ人民大衆と結びつき定着した運動を進めているかの教訓を交流し、ML同盟・労組委として新たな組織再編を前提として、どの程度まで一般化、普遍性をつかみとれるか試みてみたい。

つまりML同盟と「工作者グループ」が、上下関係ではなく「ともに『党の革命』をヤロウじゃねえか」ということであり、「マー、もっと人民大衆と結びつかなくてはいいねえ」と思っている人民の教訓交流誌みたいなものにした。もちろん、これだけに終わってしまえばいけないが、これすらも出来ない所に問題があった。前号に「男は黙って典型創り」と書いた。時代はそうなっていると思う。典型を引き上げ、それを集約することに全力をあげたい。又「典型」が教条であってはならず、それを防ぐ力こそ毛沢東思想であるだろう。

われわれの方向とは、「中間潮流」による 大衆路線 — 日本的に土着化した、理論はいかにしてつくられ、それはいかなる実践であり、党と大衆との社会的実践の構造を組みあわす、認識論、実践論、組織論 — と軍事への不徹底さに由来した大言壮語と理屈のマネ返し、そして大衆の引き回しと囲い込み等により、革命運動の正しい方向をネジ曲げようとしている時に、「党の革命」を人民大衆とともにやり抜きたいということである。

その第一は、何が何でも「大衆路線」の人民大衆との結びつき、もちろん暴力革命の思想による、がどの程度まで出来つつあるのかの教訓の中から理論、思想の整理をしていき新たな組織再編を目指していきたい。

- 「党の革命」を長期に渡って人民大衆とともに闘いとうろろ！
- 全国に「工作者グループ」を無数に創ろう！
- 徹底的に自立し抜こう！ 自力更生を活用しよう！
- 「長征」を全国の労働者の教訓交流誌とし、ともに闘う戦列を築こう！

1.	若い職場工作者の教訓	
	— 71年春闘を中心に —	
2.	港湾労働者の闘い	砂糖・港湾・国鉄・全通・民間中小労働者 港湾労働者 大島 重雄 22
3.	敵を攻撃する中で味方を強化拡大すること	港湾労働者 木下 一夫 (南大阪解放戦線・工作者より) 27
4.	釜ヶ崎・その差別と抑圧	港湾労働者 大平 ひろし (南大阪解放戦線・工作者より) 30
5.	寄稿 徹底的にやっつけてやろうじゃねえか	日本教育新聞労働組合 32
6.	寄稿 未組織労働者の組織化の経験	民間中小労働者 三沢 善行 40
7.	われわれの沖繩の闘争を	マスコミ反戦 増田 秀次郎 47
8.	五・三集会の報告	金属労働者 金 田 昇 大 81
9.	映画「水俣」を見て	建築労働者 西 田 進 84

若い職場工作者の教訓

— 71年春闘を中心に —

出席者	砂糖労働者	本田 邦 雄 24
	港湾労働者	寺 西 輝 明 19
	国鉄労働者	大 山 一 22
	全通労働者	笹 塚 良 男 20
	民間中小労働者	山 口 幸 子 21
司 会	「長 征」	編 集 部

1 職場での春闘の取組み

司会。今年の春闘は、「不況」宣伝が資本家側よりかなりされておられ、又「生産性基準原理」という思想攻撃も一段と強化されておられます。各職場では今春闘の真最中だと思えますが、それぞれの職場での取組みについて話してみたい。

砂糖。砂糖の経過をのべます。春闘は1月の半ばから取組みを開始した。最初に要求額の統一をした。その中で画期的なこととは、全ての組合員が現在の賃金の不満を出しあう方法を取ったことです。従来、かなりの賃金格差がなされ、効果性、つまりよく働いた奴に多く金をあげようというのがあった。その効果性の下に賃金格差がなされ、例えば48の人が52の人よりも断然賃金が低く、一万円以上低いのがザラにいた。

同一年齢の賃金格差によって労働者同士を反発させている。賃金格差をなくすため、どのように賃金格差をなくすのか

の討論を続けて、3月下旬、同一年齢同一賃金を主張し「会社は学歴差をなくせ」の方針を出した。しかし一部大
学出の人は学歴差を欲しいと主張し、組合として一定の少
数意見を尊重し、少しの学歴差を認めしたが、大方向は同
一年齢同一賃金で要求額を出した。一万九千円を要求し、会
社側は数度の積上げで一万三百円を回答した。これは日経
連が出している現在の賃金上昇率にそったものである。組
合として、昨年の妥結額を上回るまで受取らない方針だっ
た。4月22日、一万六千八百円という去年の妥結額を回答
し、まだ闘争中です。ストライキは一度もうっていないが、
スト決議は9割で取っているので無言の圧力になっている。
つまり、何をされるかわからないというのが砂糖資本の状
況です。

まだ去年の妥結額はウチの会社だけなので、闘争を続けて
いる最中です。

港湾。港湾の検定関係にいます。春闘は3月初め、具体的には4
月からで、一万八千円の要求額を出しています。決めてい
く過程でかなりの青年層の造反が起きてきた。最底限これ
だけ取らなくては生活できないのに現実に取りたくない。
ウチの会社の新しい動きは、職能給つまり能力によって配
分するというインチキを粉砕することでした。回答〇のあ
と、団交を重ね、七千六百円、八千七百円という去年より
もかなり低い数字でした。選挙が終わって全港湾、倉庫、
検定、検数が統一して24時間のストライキを組む中で、か
なりの青年層の造反が生まれた。1回目のストライキでは

ん何もしねえでチンタラしているのに、目つきがものすご
く変わった。労働者だなーと客観的に思ってしまった。

国鉄の春闘は、賃上げと反対と反合闘争が主です。一万
九千円の要求で、妥結は九千七百四十円です。

全通。集配をしています。全通は集配と保険、預金に分かれてい
る。全通労組は約20万で全郵政という御用組合が去年出来
た。春闘は4月20日から、一万八千二百円の賃上げと日曜
廃止、スト権奪還、病休、集配枚数等が入った。

全通は重労働で「ジ」の人が非常に多い。(大笑い)
去年連続ストライキを打ったので、今年はやらなかった。
妥結は九千三三三円、日曜廃止は10月以降12月までと決まっ
たが、その他の問題は何もできなかった。

2 労働者への思想的攻撃とは

司会。労働者に加えられている思想的な攻撃について、どう打ち
破っていくかを話していただきたい。

砂糖。港湾の人が言っていた、絶対に満額獲得しなくては生
活していけないという感じの話があったけれど、スッキ
リ行かないのは、出す方も受けとる方も一万八千円がなく
ちゃ生活していけないんだという問題として受けとめてな
いんじゃないか。例えば僕が今の給料であと1年やってい
けないかという、それはやっていけないことはないよね、
ある程度ね。社宅にいる連中なんていうのは、だいたい7

職能給について打たなかった。港湾、倉庫が一万円以上取
っているの、低い部分を引きあげ、青年部の独自要求を
進める方針を取った。鉄鋼の低い回答が労働者大衆を反発
させている。今後青年部を中心にストライキを打っていく。
スト決議は90%なのでドンドン突きあげていくつもりです。

民間中小。二百人ぐらいの通信販売をしている中小企業で、女子
が圧倒的に多い所です。春闘は3月初めからで、一万
五千円の要求と住宅手当、時間短縮等を加えました。
1組と2組がいて、組合活動をやる者が少なく、日共
は「今年の春闘はダメだろう」といい、「美濃部さん
が良いことをしてくれる」と選挙に埋没してしまいま
した。私達は春闘を闘うという方針で、2組が一万一
千円で妥結し、1組に押しつけてくるのを、はねかえ
しながら住宅、時間短縮要求を出して闘っています。

国鉄。国鉄の検修関係につとめています。仕事の内容は、整備と
雑務と乗務員のおこし番です。国労は25・6万、動労は6
1・7万の組織員です。春闘の盛場は5月20日の15時間スト
ライキで、それ以前から運転関係は順法闘争に入っていた。
国労は電車関係がストライキの中心で、機関区の方はほと
んどやっていなかったが、5月20日始めて全面的なストラ
イキに入った。

検修、駅の組合執行部は「労働者の意識が低いのでやらな
い方がいい」とまでいった。しかし、組合員のスト破りを
追求する集会で「スゴイナ」とふるえてしまった。ふだ

割程度は車を持っている。そういう人間が生活できないか
ら一万八千円よこせというのと、これなんとなくウソッパチ
になってくる。僕らの会社の春闘で一番スバラシイと感じ
たのは、同一年齢同一賃金という形で、それが組合全体の
ものとして出され、とり組まれたことです。確かに多
くとればとるほどいい、これは松下幸之助みたいなふざけ
た野郎が一人で多く金をとるのはおもしろくねえから、僕
らが多くとるのはいいから、むしろ、単に賃金をいくら多
くとるかということだけではなくて、又もう一点、組合内
で労働者がいかに現実的な団結、連帯というものを作りあ
げていくのかということに焦点にした運動の方法を僕らの
会社がやったことは、すばらしいことじゃないかと思っ
ているんですよ。

港湾。今チヨット質問にあったと思うんだけど、一万八千円
要求して生活に密着した要求ということで、これはどうい
うことかと言うと、これは執行部の提案であるわけで、生
活に密着した要求を作ろうということで、執行部の連中と
か組合の活動家というのは、大衆の中に入ったわけですよ
ね。それで出したと言うのが彼らの言い分なんです。ここ
ろが去年なんかとみると、ウチの会社は他よりも安いとい
う状況があって若い連中は不満を持っているわけですよ。
それに対して、一律がかなり低いので若い連中は一律を多
くとりたいたいという案が一つあったわけです。執行部の連中
は「これは生活に密着した要求だ」というですよ。であ
るならば、それをとるまでは連続的に闘わなくてはいけな

いんじやないかという疑問が出てくるんですよ。それは今の労働組合運動がどういうものであるかを物語っていると思うんです。だから代行主義的な面ばかり出ているんで、若い層から反発を食らう。もう一つ、若い層が反発してくるってのは、例えばスト権を確立してストをやった場合でも「徐外例」というのが必ずある。ウチの職場はいるんな所に出張するので、港関係でストをやった場合、港関係でない仕事があるわけで、倉庫でもね。港に直接関係ない仕事をやる、そうすると若い連中はストなのに俺達はどうして仕事をしなくちゃならないのかという素朴な疑問がわいてくる。その素朴さに執行部は全然答え切っていない。そういう問題から造反が生まれてくるのではないかと思う。

国労：国労への思想的攻撃は生産性向上運動に代表されている。それは一に雇用の拡大 二に賃金の公平な配分 三に労資協調制という形で、一生けん命働くことよって雇金をふやし金があがるという運動なんです。中堅幹部や職制は、全員入っている。教修所につれこまれ、ミツチリしごかされてくるわけです。俺の所の平労働者はまだそれに直面していませんが、変わった現象は、職制が(国)によって人が変わってしまうということです。「あのヤロウらまるで本なんか読まなかったのに」とか「チャランポランな野郎がなんだアリアー」つまり現場に降りてきて熱心に勉強するんですよ。一般の組合員は何にも内容を知らないんですよ。5月20日のストライキは(国)反対が前面に出始めて

きた感じもあるんですよ。

全通：主任会議をいつもやっているんです。それに全通労組退者が入っていて色々調査しているんですよ。

春闘の最中は課長がピラをまくんです。「ストは違法である」とね。今年は10枚ぐらいまいたかな。組合員は全然それを読まないんですが、組合のピラも余り読まない。

(笑い)

3 2組との闘い

司会：あなた方の賃金が春闘での闘いで最底賃金 4万円というところで、女性の職場の世間並みの賃金からするとかなり高額なんです。2組をかかえながら1組が闘い抜くという困難について話していただきたい。

民間中小：圧倒的に2組が多く、1組が20数名でその中に日共がいるのもすごく困難ですけど、女性って家族持ちの男性ほど切実にこれだけ欲しいというのがでてこない。だからほとんど4万円台と聞くと「ワーうれしい、もういらない」なんて、私なんかもううれしくなっちゃって。(笑い) やっぱ春闘というのはお金の額だけの問題ではないな！と感じる。

4 労働者の団結を

いかにつくりあげるか

司会：労働者の団結をいかにつくりあげていったかについて。

民間：2組を作った思想的に労働者を分断しちゃおうということに対して、私達は1組も2組もなくって労働者をいかに結集させるかというんで、2組にピラをまいたり、2組に積極的に近づいて「会社の回答はおかしいんだよ」って言って、納得すれば1組の大会なんかも出て欲しい、と言ってもほとんど出たがらないんですよ。そういう所に、2組の執行部は課長代理なんかいて、反対意見なんか出るとギューとにらむんですよ。それで誰も反対できなくなっちゃんです。それでみんな大会なんかもガラガラと出ていっちゃうんです。しかし大会に積極的に出させて執行部に反対意見が述べられるように2組の人に日常的にことを交わすようにしています。

砂糖：ぼくが短い組合活動の中で感じたことは、労働組合の中で基本的に獲得すべきものは2点ある。それは労働者の団結をいかに強めるのかという問題ともう一つは労働者の創意工夫をいかに発揮させるかということです。その中で、春闘だとか権利を守る闘争の中に貫徹させていかななくてはな

らないんじゃないかと思うわけです。

5 政治闘争と労働組合活動

司会：ぼくらの労働運動とは、「職場でいくつのモヒカンヘルをかぶせるのか」をやってきた。砂糖の労働者からいわれた労働者の団結を強化するということ、創意性を発揮させるといふ、創意性とは大衆を思いきり立ちあがらせるといふことだと思ふわけです。ぼくらが政治闘争に参加させるという一面の正しさをもちながら一面では何か利用主義的に職場工作を続けるという、長期性を持たずにあせって何かをするという経験もあったと思ふわけです。そういうことを具体的に話して欲しい。

全通：職場での新左翼の活動は何もないです。街頭が主であったが、これからは地域や職場を主とした定着した運動を持久的に続けていかななくてはならないと思っている。労働者の話は、女の話とパチンコ、マージャンが中心だが、なるだけ面識をよくして仲よくなってきた。仕事をやらないと信頼してくれないな！と感じている。

4・28の社共集いに全通として六百ぐらい集まり、動員費が交通費十百円だった。日頃のウップンをはらそうと全員

がジグザグデモをした。外車を止め、けとぼし、止めに出
てきた男とケンカをし、そいつを労働者が囲んでしまうよ
うなこともした。何としても職場、地域での定着性を持た
ないとも起ちあがれない。時々「沖繩全軍労」はカッ
コいい。俺たちも」という労働者がいる。全通労働者は必
ず革命運動に参加すると思う。

国労・職場に定着しないとダメですよね。

必要な時、街頭に行く、例えば三里塚とか沖繩とか。「俺
達の事をなにもしていない」とか「合理化は進んでいくば
かりだ」という労働者に答えなくてはいけない。目の前で
街頭闘争をやれば参加するだろうが、「ホー沖繩」「入管
そんなことがあったのか」という意識だ。(大笑い)

民間中小：4。28は各人が代々木公園に行ったり、清水公園に行
ったりしてたり、日比谷に行ったりしてた。メーデーは代
々木が「とにかく行くこう、メーデーはすごく楽しいんだ」
などと言っていたが、みんなは参加していなかった。

砂糖：メーデーが楽しいというのはウソだと思う。組合で全員が
参加したが、メーデーとよその方で演説らしきものが聞こえる
ぐらいで皆つまらない顔をしていた。4。20は合対(砂糖
合理化対策会議として独自集会を持った。その事に対して
民青が右翼的反発であると文句をつけた。

労働運動が4。28・5・1を中心に社共を軸に展開されて
いるのだが、ぼくらが追求したいのは、組合独自なり、青
婦部内で集会参加できるようなヘゲモニーの奪取を根本的
に置くべきだ。日共との問題ですが、砂糖労組は日共より

と、日本人は日和り続けた歴史を持っているんじゃないか。
労働者大衆に、俺はこの辺は絶対にひけないというところ
を新左翼が獲得していかなくてはならないと思う。労働者
大衆は決起しないゆえに思想を獲得する必要がある。

砂糖：日共の運動を反面教師として見てみると、結局のところ、
今の組合運動はあらゆるところで代行主義なんだ。つまり
執行部の代行であり、日共の代行、民主連合政府ができ
ば、生活を安定させ、保育所もつくってくれる。

いままでの春闘の闘い方は団交ではなくボス交である。ぼ
くらはボス交の結果を一喜一憂しているだけであり、ボス
交の圧力的なものではない。日共や以前の労働組合を反
面教師として、ぼくらは労働者がいかに政治を自からのも
のとしていくのか、あらゆる運動を自からのものとしてい
く、それを獲得していく過程を春闘なり、労働争議の中に
貫徹させていかなければならないと感じるわけです。

港湾・春闘の中で二回ストが打たれ、これからも打たれる。執行
部段階で総括が出されると思うのだが、その時俺たちは教
宣部から機関紙を出し、なぜストライキが俺たちのものに
ならなかったのかということを書いていく中で、今の組合
は本主に代行主義であるということ労働者に訴えていく。
春闘以後の連続的活動をちとっていくことが重要である。
この間の工作の中で一番感じたことは何かというと、ML
派労働運動は結局のところ、頭数を増やす運動でしかなか
ったか、拠点を創るといえばわが派の人をプチ込めば拠点
ができるというイメージが強かったことは確かだった。そう

も左にいたいという意識が全体にある。全国的な傾向とし
て組合の執行部は反日共である。反日共系というのは新左
翼シンパから社会党ノンポリまでいる。総評が五ヶ塔とい
うと、俺らはそれ以上だという感じである。(笑い)

自ら戦闘的であるというものを守り抜きたいというイメー
ジが強い。全国的な組合の風土がそうなので、日共はそれ
に反発している。日共は現実の砂糖労働運動の中では市民
権を獲得していない。しかし、青婦部に一定の日共の影響
力が強まっている。組合全体で反日共であるけれど、それ
が政治性を持っていない。日共は青婦部を中心に政治的意
義をうまく持ち込んでいる。従って青婦部に民青は以外と
はびこっている。ぼくら一方で組合の戦闘的作風を守ると
同時に、日共が削りあげている疑制の政治性みたいなもの
を、つまり「美濃部を勝たせましよう」という政治性みた
いなものだけど、我々は真の政治性、つまり「労働者の社
会を作ろう」というような政治性を青婦部でつくりあげて
いきたい。日共と一定の歩調を保ちつつ、つまり組合の中
に政治を持ちこむという形では、更により先鋭化した政
治を持ちこむ工作を、具体的な運動として展開していきたい。

港湾・劉彩品が一人の大衆に「あなたは何故帰化しないんですか」
といわれたと思うんですが、彼女は どうして引けなかった
かという、例えば自分の命をかけても引けない一線という
ものがある、それが必要なんじゃないか。ただ新左翼には
それが無いというのが実情なんじゃないか。なぜかという

ではなくて、一人の工作者としてどれだけの労働者を動か
すことができるのか、ということを工作の中で感じた。毛
主席が「大衆の経済生活に目をむけなくてはならない」と
いうことを言っている。そのことで、大衆のしゃべる一言
一言にどれだけ注意をむけることができるのか、そこにど
ういう矛盾があるのかの分析がいままでなかったんじゃない
のか。単に理論だけで人はつかめないということがわか
った。理論でないなにかとは、生活の中で培われた思想を
ぼく自身その矛盾の分析を急ぐと同時に、春闘でできなか
ったことの労働者大衆への訴えかけをやっていく中で、労
働者にとって、思想とはなにかがうえつけられていくのじ
ゃないか。

国労・団結のことを言われたが、国鉄には国労と動労があるが、
動労の方が圧倒的に団結力が強い。乗務員のみということ
で組織しやすいということがあるが、スト権のない職場で
闘い続けてきたのが主要な原因だろう。つまり闘うことに
よって以外に団結は生れない。僕は一日一回合理化、賃金
政治の問題について誰かと話す。今後、青年部を中心に、
職場内反戦派労働者の地歩を固め、自立して各個人が武器
を持って闘いぬくまで工作していきたい。

全通：政治処分されている同志がいるのだが、保釈金カンパ一
つとってみても、名前すら知らない人が多い。もっと同調者
を増やし、解雇撤回闘争をできるようにしなければならな
いと思う。

6 中国卓球選手団と三里塚闘争

司会。さきほどの発言の中で、毛主席の言葉が出て思い出したんですが、春闘の最中に中国卓球選手団が来たんで、そういったことが職場の中でどのように話題になったか聞かせてください。

港湾。春闘と結びつかなかったけれど、右翼チックな奴が中国の卓球というのは強いな、そして規律があるというイメージが職場の中にある。キチンとしてるし、笑顔をふりまいているし、あれで中国に対する対応がかなりちがって来たんじゃないかと思う。なぜ、あんないい人間である中国の人達と国交回復できないんだということを労働者は追求していく必要がある。多くの職場の代々木の一元支配を日中間題を通じて切りこんでいく基盤があるんじゃないかと思う。その意味で、中国卓球団の果たした役割はものすごくデカイ。反応は少ししかない。問題はそういう少しの反応をどれだけ大きなものにしていくのが大切だと思う。

民間中小。女の子が多いので中国卓球団が来たねというところも話す。二組の執行部の人も、私のトナリにいる人だけけど、その人とは野球とかボクシングとかのスポーツ関係では非常に話が合うの。——和気あいあいとね。莊選手はすばらしいとか、私の方が強いとか(笑い)他の人も話した。見にいったという子がいたのね。その子に聞いたら、超人

的なことをするというの。あの模範演技というのがあってその中でラケットを落としたりしちゃったんだって、そしたら、ダブルスをやっていて相手の人にわたしながら打った玉を落さないで、あれは超人的だなんて。だけどそれが中国とどうのとはいかなかった。

砂糖。中国の話題はなかったが、三里塚闘争の時、組合内では大きな反響があった。屋メシのニュースの時、ほとんど全員がくいい入るようになっていた。これは中国の卓球の時にもあった現象、屋に外に遊びに行く連中がテレビにかじりついている。それが、職場内でのいろいろな形で討論されたわけです。これは非常に強烈な衝撃になっていたのは事実なわけです。多くの職場に三里塚出身の労働者がいたわけなんだけど、農民の闘いのスゴサに本当に驚いていくという過程があったわけなんです。結論とし、「機動隊はセデエ」という話になるわけで、三里塚農民の闘いに共感するというのは多くの会社だけでなく、どこにもあるという現象じゃないかと思うわけです。三里塚とともにいま一つは「京浜安保共闘」が銃を盗んだと、はじめは射殺され、その次も全部みつかった。この反応は「失敗しなければよかったのにな」という反応が労働者の中にある。労働者一般としてとらえられるのは、不確定なものだけど、権力に対する恐れと憎しみが労働者の中には現実存在している。権力と闘う者に無限に近い連帯感がある。日共の赤旗が三里塚農民の運動を「けして否定できない」というものすごく中途半端にしか三里塚を報道できない。三里塚、水俣の映画で

組合として見に行くという形をとった。映画の討論を行なった。水俣の中で、市民がチソンの工場をプチ砕していく場面があった。その中でボイラーを燃やしちまえという意見があったのだが、町全体が吹っ飛んでしまうというのでそこまでやらなかったらしいけど、その問題が討論されたとき、我々の工場があんなことをやったらどうなるんだろうという意見が出たわけですよ。その時に労働者には二つの面がある。水俣の市民の現状を支援するのと自分達の工場がおそれたらどうなるんだろう、現実社会の諸々の運動が労働者の中にある疑問なり権力の姿を浮きぼりにしているし、そういうものが充分討論の素材になって行く。三里塚闘争を支援する会みたいな物を意識的に創り上げていく必要がある。

民間中小。私達は春闘のとき三里塚闘争があって、みんな新聞の記事なんか読んでいて、カンパを通じて話しているというところで、カンパ袋を作ってそれぞれが持って歩いたんです。2組の人も1組の人もかなりカンパをしてきて、その中で、あれは2組だからとか、あの子は会社ベッタリだから駄目だとか、そういう私達の中にあつたものが打ち破られて、皆何かしら考えているんだから、それを引き出さなくてはいけない、その後が大切で、そのままにしてしまつては駄目だから、カンパがそれだけ集まったということ、三里塚闘争について知らないことが沢山ありますね。あの、代替地のことだとか、なんで三里塚に決まったんだとか、そういうもっと詳しいことを皆で話そうということ

で、毎週一回恒常的に討論会をしていくことを決めたんです。

全通。中国卓球団のことは余り話題にならなかった。三里塚闘争の時は、みんなテレビの前に来て無言で見ている。その中でポツリポツリと「機動隊はヒデエナ」というものがかかりました。みんな心の中では思っているんじゃないかな。ただ普通の時は競馬の話しか出ないな。職場じゃ政治的な話も出来ないんだから。

国労。スポーツの話はよくする。中国卓球団については、「中国人は礼儀正しい」とか「女も男も個性が発揮されていないからアメリカの方がいいや」(笑い)なんてことを聞いたぐらいだ。三里塚については、東京地本で積極的に呼びかけているので組合として三里塚などに行っている。先日も組合で三里塚に行った奴が、解放と革マルのゲバを見て、「なぜ労働者同志が内ゲバをするのかない」って怒っていた。6月初旬には国労の青年部長の呼びかけで、三里塚に行く予定です。一般の労働者は「土地を取りあげられるのはかわいそうだ」ぐらいだが、反権力意識の集中は三里塚闘争で非常に強い。砂糖の人が言われたような討論素材を職場で使いきってみたい。

砂糖。いまの代々木との党派闘争のことで、いくつか言えることは、僕らが組合運動や労働運動だけでなく、あらゆる運動のなかで追求すべきことは、自由な発言、自由な意志交換みたいなものをもっと完全に保障させるべきである。つまり、自分個人が組合の中で、いかに発言権を獲得しようか

だけでなく、あらゆる人間が自分の自由な発言の場所を獲得しうるような、そういう組合運動の一つには僕たち作り出すべきである。その一つの典型として初期の全共闘運動の輝かしい発展みたいなやつを十分総括する必要がある。それは決して、例えば全共闘運動の過程の中で日共がほとんどの学園で追放されていったわけだけれど、これは単にML派とか中核派とか、青解が暴力的に追い出したわけではなくて、大衆そのものが日共を放逐していくという、そういう運動があったわけで、その過程は、当然にもあらゆる人間が自由な発言をしていくという過程が同時にあったわけで、そういう運動みたいなのを、僕ら、あらゆる職場の中で作り上げていかなければならない。そういうことを、日共との党派闘争という観点と同時に、あらゆる人間が政治に参加し、生き生きと労働者自身が自らの運動を作りあげていくという過程の中に、絶対かかすことのできない運動であり、当然にもそれは日共の運動と敵対するものである。

民間中小：私達は、私達の運動が春闘で賃上げで解決するものではないと思う。現実的には政治闘争ってことがあるわけでしょ。だけど、本当は春闘でしかない。だから、その中で今の全共闘運動ってことが……。

砂糖：ささいな例なんだけれど、ぜひともこれ——今年の春闘では僕、まだ入ったばかりなんでやれなかつたんだけれど来年は絶対やってみたいと思ったのは、例えば、ふだんの日、大学でやっているみたいない立看出したら、驚くし、す

はいままでみたいにな一本づりのな一しょに街頭でゲバやるために集まりました。しょうな団結ではない、いわば昔のML魂しか生れない、そういう運動の欠陥を体現したにしかすぎない。今、全体的に問題になっている全体の路線をどうするか、路線の下にどうカッポるかという発想ではなくて、現実には運動をつくり、非常におかしなことを言えば、俺いま運動やって、全体的な路線がないから運動ができないということなんて、これはちょっとおかしな見方かもしれないけれど、むしろ、現実の俺が運動を作り、どうしても路線が必要になり、どうしても集まる場所が必要になってくる。そういう個々の現場の活動家の要求みたいなものによって、むしろ路線が出されてき、具体的な組織形態が決ってくるという、そういう形で作り上げていくしかないという気がする。

司会：基本的な階級闘争の視点というのは、人民に奉仕するといふ、ないしは人民のためにやるんだということ、いわば狭い党派の利益ということが、いつも対立してきたと思うんだよね。さっき、職場に入っていて、集めた部分を、どうやって特殊部隊というか、囲い込んで、集めた部分、そういう発想というのは、現実的には出てきちゃうわけだけれど、だから、本当に労働者のために、僕は最近思うのだけれど、内ゲバの論理というか、あれ自身、僕ら自身越えられなければ、とにかく話にならないんじゃないか。我々にとって党派性というのは、やっぱり日本革命の勝利に、人民を正しく導くというか、人民とともに闘いを進めてい

ぐ会社の方にぶっこわされちゃうと思う。ところが、春闘のとき僕らでかい立看を出してみたいと思う。これはおそろくアツと思うし、それに対してぶちこわすということがあったら、労働者は僕らとともにいっせいに反撃してくれと思う。ということであるとか、春闘で出された個々の問題に対して、恒常的に情宣ビラを——僕らは大学のときに情宣ビラを出していたんだよね、ところが今、組合で出される情宣ビラなんていうのは、月に一度か二度でしょ、そういうのに対して、僕は恒常的に情宣ビラを配ってみたい。これは今春闘と言わず、夏期一次金闘争からでも、青年部に入ったらジャンジャンおっぱじめてみたいことなんだよね。従って、春闘は単に金をとればいいということだけじゃなくて、そういう意味での、あらゆる政治的権利みたいなものを、現実には運動として獲得していきたい。

司会：いままで春闘の個別の職場の状況やら具体的な状況のことを聞いたわけですが、今後我々が職場で何をやっていくのかということ、あるいは、ML派の労働運動をどうやって作り上げていくかということについてふれながら、討論を続けていきたいと思えます。

砂糖：職場に入って最初にやるうと思ったことは、かこいこむためにはどういうふうな工作しようかと考えた。そのために砂糖合対の青婦部をつくらうだとか、水俣に集めようだとか等々、ようするに俺らのブルをどのようにするかということしか考えなかった。それで根本的に誤っていることは、職場の運動を現実的にもっていかないということで、僕

くというところには、闘いを発揮できないし、そういうところと離れた旧来の狭いセクト主義というか、それをうち破っていかねければ、という、むしろもっと運動を作り上げていく上で、それほどあせて何かをやるという必要は毛頭ないし、人民が世界の創造力というか、歴史の原動力であるという観念に立ちきるかどうかということが、本当にブチブチ的な焦りと本当に労働者を信じて運動をやるかどうかのわかれ目みたいな、それさえあれば、かなり大胆な工作活動ができるんじゃないか。

港湾：ストライキを見ていると、緊迫感っていうのがぜんぜんないっていうのがあるんじゃないかと思う。どうしてかかってことを考えたんだけど、それに至る過程がどのように作られてきたかかっていうんで、全然そういう意味じゃ春闘になつたから春闘やったっていうふうな雰囲気じゃない。一年中闘って春闘があるっていうイメージがない。その問題、俺達が突きつけていけるんじゃないかと思う。具体的に言えば、ここ八カ月ばかりの間、職場に入って、今変ってきたのは何かかっていけば、活動日誌をつけて、例えば毎日誰々と話した、こういう内容の話をした。その統計をとって、一人一人の思想傾向、あるいは矛盾はどこにあるかといった調査活動を今やっている。そこまで調査やらないかぎり分析なんてできないし、どういうふうにかかっていうことを一般的に語ってもしようがない。そうやって活動をやり出して、そういう活動の中から、春闘のストライキにおいて緊迫感がないのはなぜかというのが明らかになるだ

ろうという方向なんだ。機関誌の問題なんかもあるんだけど、毎日出せるような機関誌をできたら出してみたいと思っている、教宣部の中から。そのヘゲモニーを俺がつかむかどうかという事でかなり違ってくると思う。ぜひ出したという形でヘゲモニーをとって、毎日毎日気づいたことを大衆に訴えていくという作業を連続的にやっていかないかぎり、大衆の矛盾がどこにあるかっていうこともつかめないし、その中でしか、大きな意味で労働運動をどのように作っていくかということも出てこないんじゃないかって、俺自身も思っていることだし。その辺の問題をどう解決していくかってことで、一歩からはじめて感ずる感じがあるよね。重要なことは今まで俺たちの運動ってのは、労働運動はかかわってきたが、労働組合運動にはかかわってこなかった。組合運動の中で何かをつかみ、どういう労働運動が語られてきたんじゃないかっていうイメージが強い。そういう意味で、活動日誌とか機関誌を通して大衆の矛盾がどこに存在しているかを明らかにしつつ、組合運動に関わる中で、僕らの労働運動はこういうんだと、実践を通して、大衆に訴えていく。だからいま職場で一番かんじんなことは多くのことははいらないんじゃないか。大衆の間でどれだけ実践をやっていくのかっていうことで、大衆の空気にならないといけない、っていうのが俺の気持だ。調査する中から、はじめて大衆の空気になっていかなくはならないんじゃないか、そういうことが毛主席の大衆の生徒になり、教師になるという過程があるのではないか。

国労・五月二〇日のストライキのとき、電車を囲み、スト破りの乗務員に「スト破りには徹底的に対決していく。」「仕事も協力しない、口もきかない」と言ったら乗務員が電車から降りてしまった。国鉄労働者は一般的に意識が高いと言われている。それも、組合幹部のみで、あまり下からは出てこないが、ストのとき、労働者としての強固な連帯感が生れてくるのがわかった。スト破り、これは労働者の中から出てきたものだが、スト破りをフロに入れない、このことを実行した。フロの前に立看を立て、また全員で入って出るとき怪を抜いてスト破りを入れない。これがまだ続いている。検修、駅としてはじめてのストライキだったがスト破りに対してみんなは口もきかない、つきあいもやめている。こういう連帯を大事にしたい。いま二つは、整備は強制配転反対を闘っているが、その中で、持続的な闘争を続けるためにも、政治的な注入が必要であることを痛感した。つまり、ストライキと政治注入は、結合して、はじめて職場内の持続的闘争となると思う。

7 ストライキについて

司会。一万円台の大会に去年からなかったが、砂糖の場合、ストライキの迫力なんかどうですか。

砂糖。ストライキの緊迫感ほとんどない。ぼくなんか学生運動やっていたわけだけれど、学生時代、全学バリケードストライキを築いたような緊迫感みたいなものは全然ない。なみでないのかというと、一つは割りあて制の変な意味で言えば、強制されたストライキ、組合に強制されたストライキである。もう一つには、闘争の全内容を知らずに入るストライキである。これは砂糖の場合にも全然変わりが無い。現在のストライキがほとんどそのような状況だと思ふ。僕らの会社の場合、全部オートメ化されている、機械でね。従って一時間のストライキを三回やると、それでまる一日止まってしまう。例えば、一回ストライキをやってもボイラーの火を消すと、次のボイラーを点火するまでに最底八時間かかる、従ってそれを三回やるとまる一日全然動かない。時間ストを打っていくと、ストに入っているのか、入っていないのか分らないようなあいまいな時間が長々入ってしまうし、現実にはストライキに入っても、ストライキと違うのは行動ではビケッティングだけなわけです。抵抗のないビケッティングであり、だいたい日当りである。日なたばっこであるという形態でしかない。討論もなされない

ていうことが、はじめてつかめたって状況なんだ。国労・五月二〇日のストライキのとき、電車を囲み、スト破りの乗務員に「スト破りには徹底的に対決していく。」「仕事も協力しない、口もきかない」と言ったら乗務員が電車から降りてしまった。国鉄労働者は一般的に意識が高いと言われている。それも、組合幹部のみで、あまり下からは出てこないが、ストのとき、労働者としての強固な連帯感が生れてくるのがわかった。スト破り、これは労働者の中から出てきたものだが、スト破りをフロに入れない、このことを実行した。フロの前に立看を立て、また全員で入って出るとき怪を抜いてスト破りを入れない。これがまだ続いている。検修、駅としてはじめてのストライキだったがスト破りに対してみんなは口もきかない、つきあいもやめている。こういう連帯を大事にしたい。いま二つは、整備は強制配転反対を闘っているが、その中で、持続的な闘争を続けるためにも、政治的な注入が必要であることを痛感した。つまり、ストライキと政治注入は、結合して、はじめて職場内の持続的闘争となると思う。

司会。労働者が具体的な春闘の中でストライキをやっても、迫力がでてこないというのは、やっぱり現在の労働運動の社会

党、共産党を問わず、組合幹部が闘争を代行している、結果は、労働者は単なる集会の動員かあるいは、ストライキ中は付属品みたいな感じでしかない。個々の労働者が本當に、主体的にストライキに参加する過程が全然ないということ、結局それが労働者の、本来ならたとえそれが経済的な要求であってもその闘争を通じて、労働者の階級的な目ざめ、あるいは、階級的な団結がたちとられていくはずなんだけれど、永遠にそれがたちとられていない、その辺の問題をどうやって打ち破っていくか、我々にとって大きなカギだと思ふので、その辺の討論を更に続けたいと思ふます。

港灣。例えば、組合の集会なんかやっても、帰っちゃう奴がすごく多いんですよ。その辺どうしてかっていうと、組合の集会がかなり形式化している。言いたいことは全部言えるようなふん囲気、正しいことは一しょにやるうじやないかというふん囲気なんか、労働者の中にねえんじゃないか。俺たちはどう打ち破っていくのか、組合のストライキを一回やっただけで、一回目のストライキなんか、港灣の統一ストライキはこういうストライキを打つ必要があると

いうことを組合の幹部は位置付けの問題で言う。何が欠けているかという点、個別の問題を全然語っていない。港湾の中でウチの会社がどういう位置にあるのか、だからこそきょうストライキを打つんだというのが全然ないんだ。足元を見ないで、全体を語っている、というのがウチの職場で出ている。自分の個別の問題を徹底的に語り抜いていく中で、じゃ、港湾は、という形で全体におし広げていかないかぎり、自分のものとしていかなんじやないか。何か、のっけられたというイメージが強くある。港湾の問題は重要なんだという形でやってしまうストライキが多い。労働者の生活あるいは日常の中から、どれだけ汲み取って自分のものにしていくにはどうするのかということをつかまなければ、厳しいんじゃないか。形式主義というものを打破していくのは、まずふん困気みたいなものをつくっていかなくてはならない。

司会。組合のストライキの迫力のなさというものは、一つは、要求額をどう貫徹するかということ、ストライキをどううつのか、いずれにしろ、分離していいのではないか。要求額を労働者は幹部にまかせてしまっている。これは長年の組合の幹部代行主義という日本の労働運動の風潮がそれを許している。その結果、要求額に確信を持っていない、だから、確信に基づかないストライキであるから、全然しらけちゃって迫力が出てこないじゃないかと思う。例えば去年鋭い闘いをやったゼネスト闘争なんかあの経験なんかを見れば、個別の職場における闘争組織が多数存在してお

り又全体の反合と公害発生源の闘いを大きな柱としながらも、無期限ストと矛盾しない形で、末端職場のさまざまな要求を職場レベルで闘争委員会を作って職制と団交をやりながらちとっていく。確かに職制の言うように、あの中には解放区的な状況が生まれてきたけど、そのときにはじめて労働者の本場のエネルギーが全面的に開花してきたのが見られる。僕らは、そういう闘いをつくらないかぎり、一般的に賃金闘争における中で団結を強化するのであるとか、民同がやらない政治闘争を我々がやるというても、代行主義の同じ穴のムジナでしかないんじゃないか。根本的に工作方法を変えないと、労働者を階級形成し、圧倒的に革命主力として立ち上らせることは不可能だし、党派の囲い込み運動の狭いワタから打ち破れないんじゃないか。我々は、労働者の無限のエネルギーを確信すべきだし、そのために何をすることが、我々の工作活動の基本的なものである。

砂糖。非常におもしろいエピソードを言うと、四・二八に独自の集会があったけれど、その集会のとときに、わが支部長が発言したが、五月一二日に砂糖の統一ストライキをやると、そのときに、「組合としてはすばらしい闘争をやる」と言ったわけですよ。それについては内容は絶対に明かせない、ということしか言わない。これは確かに戦術問題で明かせないという問題があるが、僕らに明かせない問題は、本当に無数にある。いろいろ行なわれているボス交、団交という名の形態での執行部と会社側の話にしても、本当にぼく

8 組合幹部の代行主義

らに知らされていないことは現実には無数に存在している。細かい戦術の問題は、高度な問題であるからという名のもとに、実際には知らされない。このようなことが現実の労働運動に存在している。

全通。全通には、全通労働組合と全郵政という二組がある。これは昨年のストライキからできてきた。組合は中央―支部―分会―班に分かれ、班長は順番制になっている。仕事は組合費を集めるだけである。まったくの組合官僚主義である。宝樹が倒れたのも、下部からのつき上げが原因である。中央は、末端の労働者のことを何も知らない。例えば、「ブツ」が多い、労働過重である、病休によって一時金、給料が引かれる、ことに対してなんらの改善要求もかち取っていない。班は十人だが、その中に職制があり、四六時中監視している。職制―主任―主事―課長代理―副課長―課長という職場内秩序がある。副課長は一日中労働者の見回り役をつとめている。職場内秩序と組合官僚主義が一しょになって労働者を痛めつけている。これは横道にそれるが、最近困ったことがあった。六月決戦裁判の僕あての招請状が集配にきており、非番の職制がそれを見つけて僕に持ってきた。その日は、一日中監視された。職場の実情を考慮しなければいけないと思う。

国鉄。国鉄も中央―支部―分会―班に分かれている。労組には、国労、動労、新国労というのがある。新国労はマル生も合理化も賛成している。組合代行主義は末端まで貫徹してい

司会。組合幹部の代行主義は、一つは経済基盤というか、組合費のチック・オフの制度にもとづいている。チック・オマをやっていない組合の人の話をしてください。民間中小。私達は給料日に、各自持っている袋に基本給×レイ点何パーセント。基本給が少ない人は少なく、それぞれ額が違ってくる。そういうふうに出してやっている。集まりはだいたいキチンと。三カ月滞納すると除名。

司会。組合費の集まりは、組合員の団結のパロメーターでもある。民間中小。そうね。だから私達はもう払いたくないって言っている。むこうで使われるわけだから払いたくない。

港湾。俺んところなんかは最初から給料から引かれている。払っているっていう意識がない。給料安いっていう意識や、組合費高いなっていう意識はあるけど、払っているなっていう意識はない。けっこう組合費高いから不満はある。何もやらないのに。

要求の問題になるけど、組合は生活にみあった要求とやっている。それで出てきた要求なのに、妥結するときは情勢がどうのこうのって、代行主義マルダシのむづかしい話しておしつけようとする。それに対して、ものすごく反パツする。本当にこれ取らなければ生活できないというんであ

れば、そういう位置付けであるなら、徹底的にやるべきであるが、青年層は言う。ところが、そう言っているにもかかわらず、情勢の問題だとかってやってくる。そういうふうにするのではなく、生活できるだけ貰うのは当然のこととして、なおかつこれだけとって当然だということも組合は提起していかなくてはならないんじゃないのか。労働者は金を貰って当然なんだってことだね。今度の春闘は不況宣伝がされていると思うけど、資本金が不況だろうが何だろうが、俺らの金上がるのは当然なんだっていう意識でやっていると、今の代行主義は、少しはうちこわせるんじゃないか。

司会。代行主義をうちこわすというのは、一つには現在の労働組合の運営のしかたとか、組合運動のやり方が非常にむずかしくなっているわけだけれど、本来なら、組合の闘いなんというものは、単純なはずなんだ。てめえの生活をどう防衛するかってのから出発しているんだから。一部の部分にしか組合の役員がやれないという風潮になってから、もつと言えばコミニオン型というか、そういう機関に、僕らが内実をかちとっていけば、現在の事務能力が一部の人間にあって、一部の人間にはないなんていうのは、まったくブルジョア的な論理であって、労働組合の仕事なんというのは、最低限資本家に頭にかけている人間だったら、りっぱな幹部としてやれるはずなんだ。反戦派労働者と言われている部分だって、安保沖繩には先進的な部分だからって、そのことをあまり気づかずにすましてるんじゃないか。

労働組合運動さえ多くの労働者からかけ離れている、そういう壁を破っていかないと、大衆路線といっても、やっぱりインテリのことばのおおそびにしかならないんじゃないか。

砂糖。これも面白い例なんだけれど、第一糖業というすばらしいストライキ闘争を展開した砂糖会社で、年末一次金の団交なんか、ブルーボード一台よこせという団交なんだ。ものすごくスキャリしていて、これなんか一番すばらしい。もう一つ、賃金について、どうしてもこれだけ必要という感じは労働者もおそらく誰ももっていないだろう。だから、適当なところで妥結してもいいというのには、執行部ももっているし、労働者ももっている。そういう要求でしかない。根本的に考えなくてはいけないことは、労働者の根源的な要求をどう汲み上げていくのか、どういう闘いの中に体現していくのかということをもっと考えて作り上げていかなければならないだろう。春闘などとはぜんぜん違う闘いを、具体的に考えてみることもあるだろう。ほんとうに労働者全体をまき込む闘争、合理化等いろいろあるだろうけれど、そういうふうに、労働者が自分達の闘争として考えていかなければならないだろう。

民間中小。私達の職場では、「反ダレダレ」という職制に対するそういう運動がみられる。そういうのを、いつでもできるよりにやっつけていかなければならない。そういう運動になると、二組も一組もなく皆集まってやっつけて、ワアッとやっちゃって、そういう時は、日共は挑発だとか言う。私達が奉

闘に取り組むとき、各職場に結集できる人をそれぞれ調査して、作り出そうじゃないかって、めざしたんだけど、けっきょくは賃金闘争になってしまった。賃金闘争の闘い方が、現在ボス交で、団交やって、それを皆に知らせ、また、それをもって団交。どういう話がされて、どうしてダメなかってことは全然ない。私達が集まってきたところには会社をひき出してくるってことを私はやりたいで、それをめざしていこうと思う。

司会。組合の規模が小さければ、そのことは現実的に可能なわけだ。たとえば大衆団交ってのが、敵の攻撃に対して。たとえば一万人の大衆団交なんてのは、物理的に不可能な場合もある。一つには我々の攻撃のしかただ。二〇人ぐらい入れる部屋なんてのは、どこにでもあるわけでしょう。

港湾。俺の会社なんか、少し興味のある奴なんか団交に行く。そしてむづかしい話わかんねえってことと、何も言えねえんじやつまらねえって言う。発言権がぜんぜんない。専門化しちゃって。俺がそういう労働者に対して言ったのは、団交なんてのは発言権なくともいいから言いたいこと言っただけ帰ってこいって。なんだかんた言ったら、ぶっ飛ばしてもいいからって、ちょっと挑発的なこと言ったんだけれど。そうじゃないかと思うんだ。代行主義の問題は一つの例、あるとき俺、先輩と出張に行った。いまの組合の委員長は、仕事をどこにするかっていう、配置って役割があって、それ職制じゃないけど、時々委員長をやる。その人のことを借りれば、「なんだ、職制と同じことやってるんじゃない

か！」って言う。それから「あいつは仕事しないで組合のことばかりやっている」、やらざるの何とかって名がつくようなふん困気がやっぱりある。らくな仕事しかやらないって。だけど、「あいつに組合やらしとけば、他の部分に影響がないからその方がいい」なんだって。そういうアキラメムドっていうものがすごくある。

全通。組合の幹部にはそういうのが必ずいるんだ。大単産であればあるほど。昔の職場にどうしようもないダラ幹がいた。今度議員になったけれど、職場労働者なんてのは全然相手にしない。その幹部は、えらい人がむこうから頭を下げたので喜んでくれるらしい。

司会。きょう、お忙しいところ集まっていたんですけど、僕らとしては、こういう座談会ははじめてなんで、M.L.派の労働運動ではじめての試みで、未熟な経験でしかないと思うけれど、そういう我々の経験をこれから、もっともっと豊富化していきながら、ほんとうに三千万労働者とともに我々が進撃していくという、そういう時代をつくりたいと思うんです。春闘は各組合とも、まだまだ終わってないじゃないし、きょうの討論というのは、それなりのさまざまな職場の違いを乗り越えて、いくつかの教訓があると思うんで、春闘の中で、それから、これからの運動の中で生かしていきたいと思います。

きょうは皆さん、御苦勞さんでした。

港 湾 労 働 者 の 闘 い

港湾労働者 大 島 重 雄

第六波二四ストライキを指示する前に、業者側から団交の申し入れがあった。

闘争委員会を2時から開き、明22日の24日ストライキに突入すべきかどうか重大な討議をしていた矢先であった。執行委員会の大部分の意見は、この春闘のヤマ場はいまだと判断し、明日の横浜、東京の統一ストライキは、回避すべきだ、という意見が強く、組合の方から団交の申し入れをしてもいいのではないかと、という意見が出され、その意見に対して一部の執行委員から、「こちら側から申し込むべきでない。」「組合の姿勢をみられてしまふから申し込むべきでない。」「反対意見が出されたが、

「なにも子どもの遊びではないのだから、組合から申し込んだっていいではないか。」「

「そうだ。組合として最低線を守るべき線を引き、業者がおりてこなかったら、来週から無期限のストライキに入る構えを、みんなもてばいいではないか」

「まったくだ。われわれが、はっきり戦う姿勢をもてばいいではないか。明日のストライキは、一応、突入すべきではない。組合も、この辺を歯止めとして、交渉を申し入れてよいのではない

か。」「

闘争委員の大部分の意見は、明日の第六波24日ストライキに突入しない、交渉を申し入れるべき時である考えに傾いていた。

支部のK委員長は「じゃあ、明日はストライキに入らない平常通り、団交を申し入れることにしたが、どうかね?」

「異議ナシ!」

の闘争委員の全員一致の意見で、22日の、東京支部は24日ストライキに入らないことを決定した。

組合の事務所は、明日はストライキに入るのか入らないのか、各分会からの問い合わせ電話がひっきりなしにかかってきた。書記局の事務員は「まだ、決定していないので、5時過ぎに電話を入れて下さい!」の返答に大ワラワであった。

3時過ぎ、明日の組合の方針が、一応決まり、団交の申し入れ以後、決裂した場合、どう闘争体制を組んでいくか、討議に入っているとき、業者(7社)の代表(副労務委員長)の高山から組合に「団交を再開したい」の申し入れがあった。

N書記長は「団交を受け入れる。今夜でも、これから交渉してもよい」の電話をした。

闘争委員会の緊張した空気は、書記長の「業者側からの団交申

し入れ」電話内容の説明にホットしてやわらいだ。

業者の方は、すぐ7社の代表を集めて、5時頃でも、団交の時間と場所を電話するからということであった。

2時から開かれた闘争委員会は、業者側の団交申し入れで、「それを受ける」ことを決めて、4時頃いったん休憩した。

1昨日の夕方、関東地本(横浜、東京)の分会長合同会議のあと、K委員長は「もう、業者は絶対に団交を申し入れてこないのだから」と私にいった。

K委員長は、二〇年以上も港湾で組合運動を続けてきた経験によって、港運の業者が、どういう出方をするか、だいたい読んでいた。今週中に決着がつかないかぎり、来週からドロ沼闘争に入ることを予期していた。それだけに、明日団交を申し入れて、決裂したら、トコトンまでやる決意を私にいつてきかせた。支部にはりついている地評の渋沢オルグは、私と委員長をまじえ、三人で春闘のメドをどこにおくか、腹を決めておくべきであると主張した。

きょうの川崎での関東地本の分会長合同会議は、22日以後の方針を討議するのではなく、決起集会に終ってしまったことに不満の意をみんな示していた。

横浜は、賃上げ闘争を放棄し、職場奪還の合理化を主要な課題として闘っており、東京は賃上げ闘争を主軸に、この春闘は進めるべきで、合理化闘争は、全国的な規模で中央で統一して闘うべきであると考えは対立していた。

「地本の不統一は、明日の東京支部の闘争委員会でも当然問題になり、横浜とはやれないという意見が出されるだろう」

とK委員長はいった。

地本の会議に出席した支部の組合員が「何のためにきたのかわからない!」と方針討議のない会議にいや気がしたと帰りぎわに私に語った。

22日以後の方針について、横浜支部の方針のみ出され、賃上げ闘争について、原則点がなく、なにかを決定すべきことを両支部とも放棄してしまったのである。きょうの地本の会議のまずさはあとの春闘の総括でもめることは必至であり、東京セクト、横浜セクトが露骨にでてくることは否定できない。

「22日は、団交申し入れる。遅くとも24日までにもち、賃上げ額九一〇〇円十アルファで、現在の回答額(八、二〇〇円)を上まわらなかつた場合は、26日以後、七四時間スト、以後無期限ストで闘う」という、渋沢オルグの考えに、委員長は「いいだろう。」といった。

三人が組合事務所をひきあげたとき、六時を過ぎていた。田町の駅前の店で、三人はビールを飲んだ。委員長は、おかしな話をするのだ。年老いたせいだろう。店のテレビは、今日の国鉄ストと、明日の第三波私鉄スト突入必至の模様を映しだしていた。

案の定、きょう(21日)の闘争委員会は、関東地本のきのうの会議の総括で、「あんな会議は意味がない。」「横浜と春闘の方針がちがう」ことが、だされ、批判が集中し、22日の統一ストは「地本決定に拘束されない」ことになった。

その晩六時過ぎ、築地の港運会館で交渉がもたれた。業者側は

予備交渉で、正式の団交ではないからといって、久保労務委員長は出席せず、高山副労務委員長（はしけ社）を代表して、しゃべり「八、五〇〇円」で、終りだといった。

鉄鋼関係の鋼材を荷役する辯了社は「鉄鋼の不況で、生産調整を理由に、そんなにだしたら会社がつぶれる。」の一点ばりであった。

組合は「私鉄並み、世間並みの賃金をだせ。賃金が低すぎる」の応酬で「そんな額では妥結できない。」で、その晩非公式のトップ交渉に移ったが、額は出さず、夜九時過ぎになって、久保労務委員長がでてきて「明日、10時、団交を正式に開きたい」で散会した。各闘争委員は「ふざけている」「ストをわざわざさせたのにな」という不満でいっぱいであった。

翌、22日、10時から港運会館で団交が開かれた。組合側は、7分会の代表30名が出席した。10時30分を時計の針が過ぎて、業者はなかなか表われなかった。

委員長は私に「呼びにいらしてきてくれ」といわれ、私は、三階から一階におりていった。

一階の入口のところで、高山とあい、私が「はじめられませんか」といいたら、高山は「ごたごたしているの……」と口をつぐんだが「すぐゆきます」といって別れた。私は、業者側（7社）の意見がまとまっていなあとと思ひ、三階の会議室に戻り、委員長に伝えた。

ちょっとしばらくして、業者側が会議室に入ってきた。「八、五五〇円で、これ以上だせない。あとは、配分をどうするかで、うわづみを考えたい。」の回答で、組合は、

第二波二四時間ストライキ（ビケを張る）

第三波 二四時間ストライキ（ビケを張る）

第四波二四時間ストライキ（横浜と統一）

第五波半日ストライキ

で、実によく闘った。一〇〇時間以上のストで春闘を闘ったのは一〇数年ぶりであった。この春闘の中で、

本船の荷役作業をストップさせるため、身体を張ってまでも、実力闘争のビケを貫徹したり、ストライキ闘争は、かなり成功しストライキでは、資本に何ら打げきを与えないことを、港湾労働者にはっきり自覚させた。

海員組合も、内外部門は一四日間の持続ストを打ち、港の賃闘を先行し、また船内荷役の労働者を組織している日港労連もストにたちあがったが、平均八、五〇〇円の低額で妥結してしまい、港が一本の統一闘争に盛りあがる気配であったが、つぎつぎに脱落し、全港湾が最後まで残って闘った。

このストのなかで、非組合員や未組織の港湾労働者はストに協力的であった。そして、大部分の労働者は、全港湾の闘いに注目するとともに、なぜ、いっせいに各組合が闘いに決起しないのか、という意見をビケの説得行動の中でいたるところできいた。

さて、われわれは、春闘が「経済闘争であり」その中の団結である。一方、沖繩では5・19政治的ゼネストを貫徹し、ストライキ運動の質的相違をはっきり認める必要がある、本土の労働組合の多くは、春闘という経済闘争の枠の中での高揚であった。

レーニン「経済闘争のために政治闘争を忘れること、それは全世界の社会民主主義運動の基本原則を裏切ることであり、全労

「あまりにも誠意がなすぎ。八、五五〇円を前提にして、配分のなかで、といっても、総額をもっとあげなければ話しにならない。」

と主張し、激しく対立した。

「配分のなかで、うわづみを考えて、もしだめだったらしかたないから、配分の交渉に入りたい。」の業者の意見に、組合のある者は、

「われわれは、五ケタを要求しているので、そんな額で配分云々は、納得ゆかない。」と激しく抗議した。

「そういうことでは、決裂しかたがないが、なんとか配分のなかで、調整したい。」の業者の考えは変わらず、「組合の方もメドをつけたいので、休憩し討議する。」の委員長発言で、交渉は休憩し、団交出席者の各分会の意見は、一応、配分交渉に応じ、どれだけうわづみされるのか、業者側の考えを捜り、組合としては八千円台では、絶対ダメであることをたて前に、トップ交渉に入ることにになり、委員長、書記長、分会代表四名、計六名が、予備交渉に入った。

その結果、一律九、一五〇円（内訳＝本人給七、〇〇〇円、住宅手当八〇〇円、乗務手当一、二五〇円、家族給一〇〇〇円）のトップで、代表者が、この案をもって帰って、各分会の意見をきいたところ「不満だが、しかたがない」の意見がほとんどで、ついに仮妥結にいたり午後一時三〇分、東京支部の中心、7社との統一交渉は終わった。

全港湾東京支部は、この春闘で、はしけ社は
第一波二八時間ストライキ（職場集会の徹底化）

動史のわれわれに教えるすべてのものを忘れることである」と述べているように、五ケタ春闘は、日本の労働者に政治闘争を忘れさせる傾向を強めている。それは、労働者の目を「カネ」の力でくらませて、階級闘争と革命闘争を忘れさせるからである。

とくに、港湾労働者には、ばくち、競馬、などのカケゴトに夢中になり、カネのためには、すべてをかえりみず立ちまわるブルジョアの思想に毒されているきらいがある。「なにごともカネのため―これは資本主義世界の道徳である」とレーニンが指摘しているように、ブルジョア思想、宣伝に労働者は教育をうけ、プロレタリアートの階級思想をむしろばまれていた。したがって、このような労働者の意識をいかに革命化するか、われわれの任務である。またレーニンは「生活条件の改善をもとめてたかうちちに労働者階級は、同時に精神的にも、知的にも、政治的にもたかめられ、その偉大な解放目的を実現する能力を高めていくのである。」と、経済闘争の一定の評価をしている。

いずれにせよ、春闘は、経済闘争であり、資本家の不況宣伝に毒され、資本家の認める範囲内では、賃金をアップさせることのできなかつた大手各社の労働組合の運動は、ますます日和見主義、経済主義、議会議主義におちこんでいる。

一方、沖繩では、5・19「返還協定粉砕ゼネスト」を24時間ストライキで闘った。全港湾・軍港湾支部の松堂委員長が解雇された。米軍と国揚組（社長・国揚幸昌・沖繩運出自民党）の一体となった陰謀であり、政治弾圧がかけられた。

沖繩に関する認識の統一なきため、本土の全港湾内部でさえも、5・19スト支援行動は組みえず、春闘の中で、沖繩を政治的に孤

立させてしまふ結果になつてしまつた。「政治工作はすべての経済工作の生命線である。」(毛沢東)が述べているように、労働者に対して根気よく宣伝、扇動を続ける工作を忘れ、もっぱら「物質刺激」に運動の軸を中心にしてしまつてゐるが、現在の組合の幹部のあり方である。このような幹部のあり方に、断固として、思想闘争を展開し、系統的な政治的扇動を組織し、拡大し、労働者を結集させる強力な活動が必要であることがわかつた。

- われわれは、政治ストライキを準備するため、
- 第一に、民同運動を徹底的に学びつくすこと。
 - 第二に、地域、地区の労働者の活動者委員会をつくる。
 - 第三に、組合の新聞を、機関紙を利用する。
 - 第四に、非合法の細胞を強化し、その数をふやす。
 - 第五に、ストライキや諸闘争に積極的に参加すること。
- などを活動の主たる性格として、大衆を広範囲に組織することが必要であることに気がついた。

三月段階に「学習班」を組織したが、春闘のなかで中断された。港湾労働者は長い間、搾取と抑圧にさらされてきた。右翼勢力の温床であることは、いまだ変りない。神戸の山口組は、横浜から鹿島へ進出してきている。港の荷役会社は、大資本の下請けであり、必ず、右翼と結びついている。

港湾労働者は、大部分が、書物を読んだり、文章を書いたりするのは逃げ手である。そして、自分の意見を発表するのも逃げ手である。

どうしたら、文章を書いたり、書物を読んだり、自分の意見を

発表することをあたりまえとなるのには、まだ何年もかかるにちがいない。

敵を攻撃する中で味方を強化拡大すること

労働者全共闘運動—直接民主主義を確立すること
行動する者がヘゲモニーをとること

港湾労働者 木 下 一 夫

多くの「新左翼」は「総評解体」を叫んでいる。俺のいる組合は総評系列である。今までの感じでは、「解体」どころか「学」べきものの方が多かつたようだ。新左翼はうち倒すべき目標(日本帝国主義打倒)は示すけど、それを日常的、大衆的にどうやっていくのか、という問題になると、結局セクト(党派)に結集すること、そして街頭行動に参加することぐらいしか示せず、大衆から見れば「ゲバ棒を持った日共」ぐらいしか見えない。まして、街頭でよくやっていると、真面目な組合活動家に対して「組合主義」「改良主義」のレッテルを貼ることは、大衆の反感をかう。

総評執行部(民同)の革命への総路線が誤まっていることを我々だけがハッキリしていて、大衆が知らない事が問題なのだと考へる思いがあつた。

一昨年九月に発表されたML派の論文「プロレタリア権力を創出する労働運動」の中で、民同幹部の誤まりの一つとして「請負主義、代行主義」があげられていたが、どうやら俺も同じ誤まりをおかしていたようだ。

組合幹部がよくやればやるほど組合員は動かなくなる。組合員が幹部に物を頼むと「よっしゃ」とばかりに引き受ける(請負)ため、組合員は甘やかされて、幹部にもたれかかり、自分は動こうとしなくなる。「労働者の中に全共闘運動を」といいながら、全共闘運動の原則へ大衆をおもいきり立ち上らせる。直接民主主義をフルに生かして、指導部と大衆のミゾをなくし、納得がいくまで討論する。

△あくまで謙虚に▽

組合幹部が非常によく活動しているのに、組合員が文句ばかりいって全然動かん、というのはどこの組合でもよく聞かれるし、組合運動に限らず、多くの組織でかかえている問題だろう。俺達の組合もそうだった。分会長、書記長は非常によく動いている(良い悪いは別として)のに、分会員(組合員)は全然動かさず、分会集会をやる度に、文句ばかりでくるという状態だった。そこで幹部は「自分らは何もせんくせに、文句ばかり言いよって」

と考へ、分会員の言つてゐる事を謙虚に聞かず、頭から拒否するよ
うな態度をとる。すると組合員はますます反感をいだいたり、
「言うてもしゃあない」とあきらめてしまふ。

まずこれから直さなければならぬ。幹部は組合員が動かない
事に文句をいうのではなくて、いかにして組合員が闘いに参加で
きるかを考へ、努力しなければならぬ。「やらんくせに」とい
う前に、相手の言い分を謙虚に聞かなければならぬ。

△組合員をとりまく現実から出発する▽

総評でも同盟でも、組合幹部は専従制になつてゐる事が多い。そ
して労働者街に住まず、電車に乗らず自動車を乗りまわしてゐる
のが多い。こうした事をあたりまえだと思つてゐる幹部に、ヒー
コラ／＼いって働らいてゐる労働者の日常的不満やエネルギーを
理解することも、くみあげることもできない。組合員の為の組合
ではなくて、組合のための組合員（組合費をチャーンと払う、動員
に参加する、指令に忠実に従う等）となつてゐる組合が多すぎる。
幹部が組合員の感情（生活）から出発してゐない。統計上の数字
や図表から出発し、教条的組合活動論より出発する。そこにズレ
が生まれ、幹部の出した方針は、一般的、原則的には正しいとし
ても、その組合の状況にはそぐわないものとなる。

俺らの組合でも同じような事が起つた。昨年十月、組合は多く
の仲間を参加させて大阪府と大衆団交を行ない、日雇失業保険の
釜ヶ崎日雇労働者への適用を実現可能にした。そして今年に入つ
てアブレ手当（失業保険金—一日七六〇円）が支給されるように
なつたが、そこでいろいろの問題が起つてきた。この中で幹部と

組合員のズレが目立つてきた。これは越冬対策の時にもあつたが、

十分に克服できなかった。俺らの交渉相手は大阪府労働部だが、
実務を担当するのは「あいりん職安」であるため、労働部の方で
いよいよ返事をして、職安の方でしめつけてくる（業者が失業保
険手帳に印紙を貼らなければならぬのに、貼らないので、その
場合、職安が印紙のかわりにスタンプを押すことになつてゐるの
に、いろいろと理由をつけて、就労した事を認めないことや、手
配師に手帳を出すと次から雇つてくれないことが多いので手帳を
出しにくい—俺達もそうだ。あるいは職安職員が俺達にたいする
態度がなまいきである、等々）、が組合幹部は日雇失業保険を自分
で取つてゐないので、みんなの職安に対する怒り、ぐやしさを十
分に理解できず、みんなとあまり関係のない所で当局（府労働部
のエライさんと交渉し、労働者の職安への怒り、憎しみをそらそ
うとした（俺もその一翼をおつてゐたことを反省してゐる）。

これでは、いくら幹部が一生懸命にやつても、組合員とズレが
あるかぎり、組合員は動かないし、むしろ幹部不信（悪化すると
言つてもしゃあないというあきらめを作る）を生み出すだけだ。

労働者をおもいきつて立ちあがらせるには、労働者を取りまく
現実（図表や数字ではなくて、日々労働者が感じてゐる事実）か
ら出発しなければならぬ。釜ヶ崎日雇労働者は人間らしい生活
も保障されていない（「旗」第六号参照）。人間性が破壊されて
いる。ダメされ、裏切られ、ボロきれのように扱かれてきた人
間に、小市民の常識（酒をのむな、ウソをつくな、アオカンする
な等）を即座に要求するのは誤まりだ。なぜ酒を飲むのか、なぜ
ウソをつくの、なぜアオカンするのかを理解せずして、頭から

否定するのでは、労働者大衆との間に「俺たちとは違ふんや」
「よそもんや」という見えない壁をつくつてしまふ。

△請負主義、代行主義をなくそう▽

最初に書いたが、幹部が何でも「よっしゃ」とばかりに請負つ
てしまつたら、組合員は次の様に考へる。「組合活動というの
は幹部がやるもんで、俺達はその成果をもらふんや」という「もら
い根性」を生み出し、組合員としての責任や自覚をもたない。

越冬対策の中にも出てきて、解放戦線の仲間批判されたこと
だが、組合員一人一人が主体的、自主的にやるのではなくて、組
合幹部が何でも引き受け、代行してしまつてゐた。何でも分会長、
書記長へ一任する習慣がついてしまつて、活動家が育たなくなつ
てゐた。

△直接民主主義を確立すること。行動する者がヘゲモニーをと ること▽

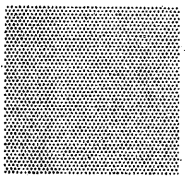
四月一五日、組合は百二〇名の仲間を動員して、大阪府と団交
を行なつた。
この闘いを取り組む中での教訓。俺達の組合の生命は「直接民
主主義」と「行動する者が方針を決定する」という2つの原則を
実行することである。

団交の中で一部の人間がしゃべるのではなくて、みんな言いた
い事を言つたり、行動する者が方針を決定する事が、俺たち組合
を生き生きとさせる事に気付いた。週一回の分会集会で、一人
も多くの組合員が発言できるようにし、執行委員会（行動隊会議）

で行動方針を確認する。このことをこの闘争を闘う中でやり始め
た。

敵を攻撃しながら、味方を拡大（直接民主主義とみんなの自覚
を高め）し、強化（行動する者—行動隊の会議を持ち、行動隊を
増やす）していくことが二重権力を創出していくのではないだろ
うか。

敵を攻撃するだけで、味方を拡大しない、強化しない傾向の強
い新左翼。逆に味方を拡大する（選挙闘争を通じた水ぶくれ）す
るだけで、敵を攻撃しない（味方を強くしない—武装しない）日
本共産党。どちらも、物の一面しか見てゐない。極左か修正主義
に陥ち入るだろう。



釜ヶ崎・その差別と抑圧

港湾労働者

大 平 ひるし

釜ヶ崎の朝は早い、朝五時には求人車がくる。釜ヶ崎の朝は生き生きしている。朝六時半から七時半が労働者が集まるピークだ。

労働者は五時過ぎから七時半ぐらいいにかけて仕事をみつめる。組合でピラをまいていると労働者たちははなしかけてくる。「にいちやん、よう頑張るなあ、一生懸命やりや！」「みんな団結せならん、団結してマンボ(賃金)をあげて、手配師や人夫出しを追放せなあかん」仕事の少ない日などは「にいちやんピラまいたって何になるんや、もっと仕事をとってこいや、にいちやん、わいは釜ヶ崎に十五年いるんや、いろいろあったけど、にいちやんらも途中でやめずにやってや」。酒によった労働者、ピラをわたそうとする「なんやこんなもん、いらんわい、わいは十年も二十年も釜ヶ崎にいらんやナメトッたらあかんやエ、アホンダラ」きびしい、ピラを読んでくれなかった。

俺は時々しかピラをまかないが、ピラや集会などに参加するたびに釜ヶ崎での運動の困難さ重さに俺に出来るだろうか? という気持になる。それに俺はまだ二〇才、若いということ労働者は信用してくれない面もある。困難だけど、重いだろうけれどや

らなあかんのや、俺達の革命はこう云った人のために、そして日本底辺人民のために、自分たちのためにやるんや! 近頃、釜ヶ崎でもいろいろな物が高くなった。朝メシ、昨年、一昨年は百円あったら腹いっぱい食べた。今では腹五分ぐらいしかくえん。ドヤも衣類も酒も高くなった。だんだん生活がしにくくなる。それにマンボは全然あがらない。

俺は今、堺の臨海工業地帯にある三井東庄と云う肥料工場にっている。元請けが三井、下請けが上組で俺たち労働者は上組にやとわれる。三井は俺たちが二十四時間働らくと一万五千円の金を出す。しかし俺たちに入る金は七千七百しか入らん、上組が半分ピンハネしとるんや、この工場は中国向けの肥料をつくっている。七割は中国にくらし。労働条件は非常に悪い、メシはよくないし、肥料のホコリがすごい。一週間もいくとノドや鼻がおかしくなる。それでマスクの一つもくれん。それで安いマンボでチョンだ。

それでも労働者が文句を云うと「明日からお前こんでエエで、もつとエエとこあったらそつちの方へいったらエエがな!」ここは中国の船が時々入る。船が入ると「日中友好万才!」

と云う大きなタレマクをかけ、中国の歌をレコードで流し、三井の社員は大きい大きい「毛主席」のバッチをつけてまわる。船が出ると全然ナージ。ああ白々しいたらありゃしねエ。三井のバカヤロー!

釜ヶ崎の労働者もかわったような気がする。朝、仕事に行く時キレイな背広を着ていく人や俺から見るとよそ行きの服を着ていく人が多くなったのだ。作業衣を仕事場に置いて来る人たち、袋に入れて持って行く人が多い。

労働者が仕事の帰りに電車やバスにのると回りの客がはなれたり、イスに腰かけると両脇が満員でもあいたりする。地下タビはいてタオルではちまきしてよごれた作業衣を着てるからだ、ネクタイしめて背広を着た、サラリーマンやOLだかBGだかしらんがそんなお嬢さんたちには恐いのもしれへんけど、やっぱり頭にくるなあ。

ある労働者はこんな時やけど「新今宮駅」(釜ヶ崎の玄関)につくと安心するという。自分のふるさとに帰った気持ちになるという。サラリーマンにはわからん気持だろう。俺でも仕事が終ると一刻も早く帰りたい気持になる。帰らんことには落つかんだ。

労働者はよく酒をのむ。時にはのまされるものもある。のまされて道路パタにねている。おこすのが気毒なくらい気持ちよさそうな顔をしている者もある。酔ってクダをまくものもある。ケンカをする者もある。

労働者はよくギャンブルをやる。十日間一生懸命仕事し金をためてバクチをする。一日でスツカラカン。雨ふり、映画館、パチ

ンコの玉を打つ、真険な顔もある。今日も負けた。でも何故かサッパリしている。

「釜ヶ崎の『労働者』(差別用語)はのんだくれて、バクチ打ちで、恐い人間や、何するかわからへん」人はよくこう云う。見たこともないくせに無責任にいう。

釜ヶ崎の労働者はそんなじょそらの労働者より仕事はようするでエ。一丁雇ってみてみたいといいたい。

酒はのむ。バクチはやる。しかしこれしかたのしみが無い。ちよう考えてほしいんや、何故釜ヶ崎の労働者や山谷の労働者が、酒をのみ、バクチをするのか!

俺たち釜ヶ崎労働者は今まで無権利状態だった。やつと失業保険と健康保健が出来た。でもまだまだ行政の怠慢でみんなにいきとどいていない。

釜ヶ崎の闘いは一言で云えば人権闘争かもしれない。それでもいい。釜ヶ崎の場合はそこから出発する。人間としてびてもらえなかつた人間の闘いや!

釜ヶ崎の労働者は莫大な力をもってるでエ! 今にひっくりかえしたるでエ!

行政は金を出して手配師をやしなっている。おれらは許さないでエ! 絶対に追放したる。

釜ヶ崎は労働者の街や、労働者がすべてを支配するんや!

今に権力を取つたるでエ!

釜ヶ崎解放! 労働者に権力を!

南大阪の地で闘っている底辺労働者の闘いの武器、地域での闘いを作りあげ、様々な革命的労働者との結合をめざしている。

工 作 者 第7号 (改題一号)

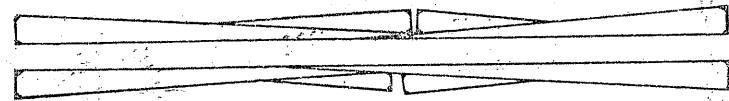
—— 特集・釜ヶ崎 ——

南大阪解放戦線

連絡先 / 大阪市北区浮田町十一

青 脈 社

レポルション社でも取扱っています。



寄稿

徹底的にやってやろうじゃねえか

日本教育新聞労働組合

偽装解散、それは中小の出版・新聞など、機械より「人間」に強く依存した企業ではいとも簡単に用いられる労働組合の手ごころな生殺手段である。いやそうであるかに考えられてきた。

日本教育新聞は、外見は記者クラブ・新聞協会などを利用してあたかも「公正・中立」な教育界唯一のジャーナリズムであるかのポーズをとりつづけているが、その実質は文部省の完全な御用紙であり、労組がその新聞の編集権奪取をスローガンに掲げたとき資本はいとも簡単に偽装解散を強行した。ことし一月十八日のことである。

日本教育新聞は戦後間もなく、戦前の軍国主義教育や師範学校制度の反省を標榜しつつ、生れついで「民主新聞」であるかを装って教育界に登場した。戦後の社会が「アブリアリな」と与えられた民主主義に「にわかかえって」いたころ、この風潮に乗って購読者を獲得しようとした元翼賛壮年団長秘書・大山恵佐の破廉恥な転身がそこにあった。しかし、この営利を目的とした偽装民主新聞は、ひたすら営利を目的とするが故に、販路拡張のためには平気で何度でも転身する。一九四九年の中国革命以後、GHQの指導により戦争犯罪人の国外追放解除、警察予備隊の設置、レッドパ

ーシ、日米安保条約の締結等々、日本の「反共の砦」としての役割が露骨に、かつ急速に強化されるに伴い、教育委員会制度もこのブルジョアジーの野望にそって戦前以上に中央集権化されていった。このとき日本教育新聞の再度の転身がはじまる。民主新聞を装って本社を日教組本部のある日教組教育会館内に置いてスタートした新聞は、そこに居座ったまま完全な御用紙として中身を交えるのである。つまり、文部省―都道府県教育委員会―市町村教育委員会―校長・教頭という集権化を強化するパイプの役割りを進んで荷負い、文部省にへつらい、教育委員会の指導に沿った新聞を発行することによって、市町村教委の一括買上げや県費による一括購入を獲得していった。一括購入された新聞は、翼下の小・中学校にくまなく配布される。

読者層を校長・教頭という教育現場の管理職と教育委員会を中心に拡大した新聞は、具体的には次のようなキャンペーンをこれまで張りつづけてきた。たとえば昭和四十一年の「ひしめく四十才教師」。これは小中学校に四十才代の教師がひしめいていることを塗計的に指摘することで、従来の管理職登用制度の「改善」を主張するもの。このキャンペーンをうけて文部省・都道府県教

委は「校長・教頭試験」を実施した。この結果、試験を受けようとする者は自ら進んで日教組を脱退し、管理職的思考・ふるまいを「学習」する。つまり一人分の管理職手当によって五人、十人の予備軍を文部権力を獲得したわけである。さらにこの四十代総管理職化に成功した権力と資本は、「校長・教頭試験問題集」を単独の出版物として教委を通じて現場に流し、とどまるところを知らない資本の利純追求ぶりと権力の徹底した支配欲を遺憾なく発揮した。

去る四月二十八日、衆院文教委員会で強行採決された新教法に對しても、我が日本教育新聞は「偉大な貢献をしている。これは昭和四十三、四十四年の「専門職」「純専門職」としてキャンペーンされた。教師はたしかに聖職ではない。しかし労働者でもない。教師は専門職である。したがって専門職らしい社会的地位と待遇、専門性の自己練磨が必要である——こう主張する「専門職」が、教師が自らを労働者と規定することから積極的に要求した超過勤務手当を教職特別手当にすり替え、労基法からの適用除外をねらった新教法を先取りしたキャンペーンであったことは明らかである。

そして今回の偽装解散劇も、実は新教法と両輪の関係にある中教審最終答申と直接関連したものだ。近く最終答申される中教審の初・中教育改革に関する答申は教育現場の重層構造化とは、これまで校長しか明確に規定されていなかった現場の管理機構に、企業内の管理制度を運用して教頭・主任を明確に規定することである。企業内の部長・係長よろしく、学校でも教科主任・教務主任が制度化されるわけだ。しかもこの乱造される管理

職と、日本教育新聞の販路拡張とはびったり一致した利害である。校長・教頭試験が問題集によって資本に思いもよらぬ増収をもたらしたように、この重層構造化は販路の飛躍的拡張、つまり従来の学校単位(校長)の購読から個人購読へと新しい分野を切り開く起爆剤となるわけだ。日本教育新聞を読みはじめることは管理職になるためのパスポートであり、同時に日教組組合員としての自己に対する訣別のしるしでもある。そんな日本教育新聞の経営にとって、闘う労働組合の存在、とりわけ編集権奪取を公然とスローガンに掲げる組合の存在は脅威であり、あらゆる意味で抹殺しなければならぬのは資本にとって必然であった。「権力の好み通りの中身にできる新聞です。どうぞお好きなように」といって忠誠を示すことが、重層構造化を販路拡張に結びつける何よりの手みやげである。

我々の闘いは昨年春闘で表面化した。六九年から着々と労働組合の再建をめざしてきた闘う労働者たちは、七〇年春闘で二十数年來続いた「一発回答」を打破した。そしてこれに對する反動が前委員長(会社側は彼を組合の校長先生と呼んでいた)不当配転、現委員長不当解雇となつてあらわれた。現職の委員長に興信所の私立探偵をつけて何日もつけまわしたあげく、「業務時間中に映画をみた」ことを理由に突如解雇したのである。文化欄の記者が映画を見ることは当然であるのに、これを一般的なサラリーマンの倫理観に照らして卑劣にも解雇攻撃をかけてきたわけだ。労組は前委員長の不当配転に何ら反撃できなかったことへの自己批判をこめて、即刻緊急組合大会を開き、全員で無期限ストライキ突入を決意。翌日から職場完全占拠、幹部追求の大衆団交、パ

リケートの構築、印刷社に對する出張チケット、全面的なストライキ態勢にはいった。このストライキは四七日間闘いぬかれ、①委員長解雇白紙撤回・即時原職復帰、②反動編集局長退陣、③労働協約締結、④夏期一時金満額獲得——という労組の獲得目標はほぼ完全に勝ち取られた。都労委で協定書を交わし妥結したのは八月十五日であった。

この闘争中に組合脱落者も出た。彼らははじめから編集局長以外の会社幹部と結び、幹部間の派閥争いに闘争を利用しようとした連中である。おかしなことに会社の回答も編集局長退陣を早くから受け入れていた。後でわかったことだが、これは編集局長に對抗していた業務局長が、すべての回答書の草案を作成して、社長大山恵佐を説得していたためであった。脱落者たちはこの業務局長らと結託し、「悪の根源・吉岡編集局長が失脚したんだから、もういいじゃないか。少しぐらいの処分は仕方がない。一時金や協約はストを解いて話しあえばいい」と、無期限スト突入後わずか一週間にして主張しはじめた。二三日連続的に団交が開かれ、この回答と内部の裏切り者の呼吸の合ったトリックが何回かくり返えされる。これ以上組合内部が動揺させられることを危険視した執行部が、あえて除名を断行したのもこの時である。会社側は脱落者と幹部による新聞発行に踏み切り、団交拒否が続く。これも後で解ったことだが、脱落者は除名以前に会社側に密通して、秘かに新聞発行を手伝っていた。

この脱落者たちはストライキ妥結後、新たに「主任」として論功行賞を受けるかを見えた。七〇年秋の主任制度粉砕闘争のスタートである。会社は労組がストライキ中にスローガンに掲げばじ

めた「自由なる教育新聞の創出」に對抗すべく、新しい編集機構の基軸にこの「主任制度」をすえてきた。脱落者十六人と組合員一人を含め、十七人を一挙に主任として優遇し、管理強化、組合崩し、実質的第二組合育成と目論んだのである。現に水曜会なる第二組合的組織も結成された。主任制度粉砕闘争は主任選定基準の不明確さとその意図の暴露、及び労組による新しい編集機構と紙面構成の実施というかたちで追求された。ストライキ以後「編集権奪取」を編集内容中心に追求してきた労組は、主任制度粉砕闘争を契機に「社内権力の奪取」を平行させて闘わないかぎり、実現できないものであることを知った。大衆団交による幹部一人一人の追求、糾弾によって主任選定基準のデタラメさは暴露され、深夜団交、サボタージュなどによってその意図は粉砕された。会社が、夏のストライキで結んだ唯一の交渉権・人事の事前協議制などに對する協定書・確認書・申し合わせ事項などについて「その解釈・運用・適用範囲・苦情についても事前に協議する」という確認書を受け入れて主任制度を「無期限」したのはそれから間もなくであった。

我々はこの秋の主任制度粉砕闘争で多くのことを学んだ。労組は夏のストライキ以降、編集権奪取の試行錯誤を余議なくされてきたといえる。つまり、編集内容をどう変えるか、紙面の中身をどう従来の「文部省は——」で始まる記事から脱却させるかという問題にとらわれすぎ、たとえば、東大闘争の弁論をそのまま紙面に持ちこんだり、光文社闘争の現況を当該労組員に執筆させたもの、デスクに日常的に論争を挑んでいたもの、あるいは三里塚の少年行動隊など、日々の取材活動を慎重に考え直しはじめた

もの、等々さまざまな試行錯誤が連続していたわけだ。しかしどこからアプローチしても所詮頭うちになることを避けられなかったといえる。「現代の眼」や「構造」や「朝日ジャーナル」など一見左翼的な、いや新左翼的編集内容のものでさえ、それは立派に商品化され、企業を資本を存続させているからだ。主任制度粉砕闘争はとかくジャーナリストという労働者の、陥りがちな幻想と免罪符の隘路に対して、我々に新しい課題を示したといえる。編集内容がどうであれ資本にとっては売れる商品ならばよく、そのことに生き甲斐を感じ、誇りをもって自分から残業・出張など進んで労働強化をかって出る労働者がいれば、資本はムチのいらぬ羊をかっていているようなものである。ジャーナリストはジャーナリストである以前に労働者である。労働者であれば、その生産物の如何にかかわらず、資本と真向から対決する闘いを余議なくされる。これを回避して紙面の「左翼」も「進歩的編集」もない。

編集権奪取のスローガンは編集内容にかかわる「刷新」と、企業内の権力奪取という具体性をもって再確認された。しかも単なる編集職の問題ではなく、広告・販売など、社内のあるあらゆる業務について、労働内容の刷新と社内権力の奪取をどう実現するかという問題として追求された。販売部では、日教組にはいらない新卒教員や、日教組内で不満をかかえた闘う教師にどう託ませていくかが論じられ、具体的な調査活動も開始された。労組は教育問題研究会、マスコミ研究会、労働問題研究会の三分科会を組織し、全員がこのうちのどれかに加わることで、新しい学習活動と取り組んだ。そして闘争の焦点化と労組内の再編をはかりつつ七〇年年末一時金闘争を迎える。

的なる学生運動経験者も何人か含まれている。逆に組合に残って闘いぬこうとしている者は素朴な労働者意識をもった者が多い。大分など出ていない者ほど、りっぱに闘いぬいでいることは、組合分裂の注目すべき一例ではないだろうか。

社長大山恵佐は表面上退陣したかに見える。新社の重役も、我々の知らない人間が登記書に名をつらねている。しかし、新聞を発行している者は全て同じ日本教育新聞社の社員であることに間違いない。大山恵佐は文部省社会教育局嘱託から大臣秘書に乗り上げたこともあり、第一新聞協会理事長・内閣新聞出版用紙割当委員なども歴任してきた。現在、日本短波放送取締役、NET常任監査役、財団法人科学技術教育協会理事長、教育広報社長、日本海事新聞社長、東京タイムズ印刷社長など、肩がきには事かかない。この東タイ印刷では「文部公報」も印刷しており、近々「反動教育センター」としてこの印刷社を五階建てのビルに建て直すため目下工作中である。無節操な履歴には「藍綬褒章」というお飾りまでついているしまつだ。四十二年度からは「全国へき地教育新」の発行委託費年間一千四百万円も、堂々と文教予算の一角から日本教育新聞社に支払われている。もちろん偽装解散後はデッチ上げ新社に継続されていることはいうまでもない。これは文部権力に忠誠をはたしてきた新聞に対する文部省のみかえり金であり、また紙面操縦のためのエサでもある。そしてこの公金の不正使用が目にあまる労働者弾圧と搾取の上に五年以上も続けられようとしているわけだが、ここでは年間約一千万円づつ着服してきたという事実を記すだけにとどめよう。

我々の闘いは一企業の労働組合活動を越えて、大きく飛躍しつ

この一時金闘争は残念ながら不十分な闘いに終わった。それは二月以上以上に長びき消耗戦だったということと、経済要求と編集権奪取のスローガンをとびつたり一致させられなかった点などに主な原因があった。「金は適当にもらえればいい、もっと本来の闘争をじっくりやるべきだ」「夏以来、闘争の連続で疲れた。女房に泣かれてどうしょうもないし、自分の時間も欲しい」という意見が出はじめ、十二月二十五日、第六次回答の二、七プラス七千円（要求一五、五ヶ月）で妥結した。このあと時限ストライキのうちかた、都労委の使い方などで組合内部に混乱も生じ、会社幹部による毎夜毎夜の自宅オルグも手伝って七人が脱落した。このときの自宅オルグではすでに偽装解散による組合員解雇、再雇用の際の好条件などが暗示されていた。脱落した部分は自称ジャーナリストのインテリたちである。「書くことも闘うことも一致させたい」「組合活動をやらぬ」「強さ」を身につけたい」「オレの「仕事」をしたい」等々主張して、これまでの編集権論議や、自己切開・主体性を主張した自分をなんとかねじまげて、脱落の正当化をはかったのである。

組合は彼ら脱落者が夏のストライキ時の脱落者とはっきり違うことを確認、新年からの再オルグ、戦線復帰を方針化し、これと取り組んだ。しかしその矢先、一月十八日、突如解散劇が強行されたのである。

現在の日本教育新聞はデッチ上げ新社・株式会社教育新聞社（「日本」がとれただけ）から同じ題字のまま号数も引き続いて発行されつづけている。発行しているのは旧会社幹部全員と、非組合員＝裏切り者全員である。彼らの中には六五年以後の新左翼

つある。残念ながら印刷所ビケに対する東タイ印刷労組（全印総連傘下）の敵対、つまり「トロッキスト」呼ばわりの闘争妨害、また日教組・教科書共闘（出版労協）などの非協力といった側面も現にもっているが、分断されていた多くの闘う労働者、とりわけ教育関係の戦闘的な労働者を広く結集して闘いぬかれようとしている。教科書共闘が統一要求と統一交渉という数字とスケジュールの統一に明けくれ、家永裁判勝利に酔っているとき、教科書労働者は編集者登録制度によって、その思想、趣味、行動まですべて権力にチェックされるというがんじがらめの攻勢下にあえいでいる。この忘れられた教科書を生産する労働者として、その国定化、管理統制とどう闘っていくのかという問題をかかえて、戦闘的な労働者が教育新聞闘争に結集しつつある。「教育闘争」は都市だけでできる闘いではないという意識から、日教組・都教組内の活動家も結集しはじめた。また文部省外郭団体の日本育英会・公立学校共済組合・社会教育連合会などの活動家や労組も支援・共闘を宣言している。もちろん、定着しない労働者と職制の乱造劣悪な労働条件下にあって熾烈な闘いを余議なくされている中小の専門紙・業界紙の闘う組織「全国専門新聞労働組合協議会」が全面的にこの闘争を支えていることはいうまでもない。

しかし、どんなに多くの活動家・組織に支援されても、この闘いを担いきり、勝利することはそうやさしいものではない。この闘争に結集する労働者自身、多くの闘いを戦闘的かつ熾烈に闘いぬくことを要請されているからだ。そしてこれをまとめきる組織の問題も残されている。さらに光文社、NET・NTV全労闘、事時通信、学芸通信や木原正三堂など、多くのマスコミ諸闘争と

連帯・共闘を勝ちとりつつ、新たな労働の構築を実現することはこの教育新聞闘争に永続的、徹底的な闘いを要請しているといえる。我々は「自由なる教育新聞の創出」を編集権奪取のスローガンの発展として追求している。そしてこのスローガンも、我々の闘いを長く、熾烈なものとして決定づけている。

偽装解散以来、デッチ上げ新社の非組合員、幹部による日本教育新聞のインキ発行を阻止するため、我々はいくつかの行動を展開してきた。東京タイムズ印刷社に対する説得ピケ、デモ、新社に対する抗議集会・ピケ、文部省デモや読者・広告主・銀行に対する情宣活動など。しかし、敵も偽装解散後の新しい体制をほぼ整えつつあり、この五月十八日号からは再度、解散以前の6ページ(四ヶ月間は4ページに落ちていた)にたて直す構えである。我々は五月闘争をより徹底した生産ストロップの攻撃として闘いぬく方針である。とりわけ印刷社での完全ピケットは、どんな妨害困難が伴おうとも貫徹されなければならないと考える。同時に当該労組が最後までバイタリティーをもって闘いぬくために、主体の強化もより徹底されなければならない。

当該労組員十四人は、現在五人の専従者を残してアルバイト態勢に入っている。妻子と共に闘うこと、労働者が全生活をかけて持続的に闘いぬくことはなかなかむづかしいことだ。生活の共同化もことばとしては納得できても、一つ一つの行動となると徹底しにくいこともある。しかしそれらを一つ一つ克服していくのが我々の闘いであり、生産ストロップという攻撃であると思う。ふと我々の意識をおもうと安易な逃避——つまり、もう少しいやがらせをやって「示談料」なり「退職金」なりをいいかげん取って落

ちつきたいという考え——さえ、だらしがないといって切り捨てるわけにはいかない。それは我々の自身の問題であり、これを組織的に克服しないかぎり、闘争を持続し切ることができないから。とくに中小企業では共通して労働者が定着したがない。どこからアブローチしても出口なし、頭打ちとなる。だから、解散直後の討論で「職場復帰」なら闘いたくないという主張が繰り出したのも不思議ではない。「こんなところに未練はない、どこえいったって食っていきける」という意識と、「きたねえやり方をされちやあ黙ってられねえ、徹底的にやっつてやるうじゃねえか」という意識が混同しているわけだ。闘争四ヶ月を迎えた現在でも当該組合員の意識にはたえずこの二つの問題が頭をもたげる。ただ強みは誰れも我慢して押さえることもほしくないことだ。十四人の組合員は三班にわかれ、討論と作業を分担しあい、論理的な主体の強化をどこまでも押し進めていこうと頑張っている。

教育のブルジョアの再編が、具体的な労働組合圧殺となって職場に押し寄せ、これと職場を通して真向から闘おうとしている労働者の闘いに、すべての闘う労働者、市民、学生の支援、共闘を訴える。

日本教育新聞社労働組合
千代田区一ツ橋二の六の二
日教組教育会館内(闘争本部)
TEL
二六四・二五六二

教育新聞闘争の記録①

教育闘争

ハドキコメント

自由への叛撃 2

闘争小史 7

アピール/連帯の輪を広げよう 11

公開質問状/文教予算の不正使用を
告発する 14

¥ 100

日本教育新聞労働組合

レボリューション社でも取扱っております

未組織労働者の組織化の経験

民間中小労働者

三

沢

善

行

俺たちの職場は、従業員が二百六十余名の中小企業である。この職場で昨年九月に労働組合を結成し、賃上げ、職場改善闘争を闘ってきた。

組合が出来る前は、社員、従業員、臨時、パートという四段階の身分差別があり、労働者が互いに分断されていた。会社の運営は、社長と一族によって牛耳られており、職場には、古手のボスが君臨しており、労働者の不満は、このボス達によっていつもにぎりつぶされていた。

1 準備過程の活動

俺達の会社には、部長からパートを含む親睦会があり、まずこれに目をつけた。今まで親睦会は、主に部長だけによって役員を占めていたが、四月の改選期には、「労働者の本当の親睦会を作れ」という主張を掲げて組合結成準備会のメンバー3名が立候補し、全員が親睦会の役員に当選した。そして今まで、親睦会は単に会員に対して金を借すという事しかやっておらず、多くの労働者が不満を持っている親睦会の体質改善を目ざした。三名を中心に、文化部、体育部の活動を活発に行い、本社、工場

というふうに分断されていた労働者を全体の活動の中で交流を深めていく。ハイキング、ボーリング大会、等の中で準備会のメンバーは、機会あるごとにさまざまな労働者と話しをし、不満を聞き、労働組合の必要性を話してきた。

親睦会での活動を通じて、労働組合結成に向けて多くの労働者をそのまわりに集めて行つた。八月に入って準備会を結成し、本社、工場での具体的なオルグに入っている。これは毎週一回ずつ、会合をもって、それぞれの人間がどこまで仲間をふやしたのか、当初予定していた労働者を仲間として獲得出来たのか、職場内の人間関係、仕事上の関係等を具体的に調査してオルグを続けていった。俺達の準備会には、準備会を正式に結成してから一ヶ月位の活動の中で二十数名の仲間が集まってきた。この頃になると、準備会の活動は一方で大衆化して多くの仲間を集めるといふ事と、それによって労働組合結成が会社側に発覚してしまうという矛盾につきあたった。俺達は組合結成に対し、現在まで集まった二十数名はどんな事があっても組合を作る、という固い決意を全員で意志一致しておいた。さていよいよ組合結成の名乗りを上げる日どりを討論した。始めは八月最後の土曜日の昼休みを予定してい

たが、地区労オルグの助言によって、九月に入ってから第一月曜日の昼と決めた。

2 労働組合結成

九月の第一月曜日の昼休みのベルが鳴り終ると同時に、準備会のメンバーは、食事中の労働者に向かって一斉にピラを渡し、組合加入書を持って職場を走りまわった。労働者へ渡されたピラは次の様に呼びかけている。

組合結成に至るまでの経過報告

まず最初に私たちの働く××工業に労働組合が結成される事を喜びをもって報告します。私達の会社では今まであまりにも理不尽なことがまかり通ってききました。例えば、臨時、従業員、社員という身分制による差別待遇とか、職場環境の劣悪な条件のおしつけ等々です。

そして私達は「現在のままでいいのだろうか？」という素朴な討論から組合を結成しないかぎり、会社は私たちの生活を守ってくれるものではないという認識をますます固くしたわけです。そこで八月一日労働組合結成準備会を本社、工場の仲間×名をもって組織し、八月一五日には更に討議を深めて行きました。

そして八月二二日の準備会では各準備委員のオルグ活動の報告を総合検討した結果、会社側の不当な弾圧、介入を排除

するためにも上部組織に加盟し、その指導、援助を受ける必要があることを互に確認し合いました。

翌二二日には××区労協のオルグに会い、その協力を受けて八月二六日に××名の仲間を結集、準備会を開催、ここで最終的に組合結成にふみきることを意志統一した訳です。

私たちがこの時点で結成大会開催にふみきった理由は、私たちの外にも多数の職場の仲間たちが現在の会社のやり方に対して大きな不満を持っているというところを、従って私たちが団結して会社に要求を提出し、全国の働らく仲間と堅くスクラムを組んで闘うならば、必ず勝利を得ることできるという確信をふかめたからです。

××工業の仲間の皆さん

この本日の結成大会を成功させ、その輝やかしい成果を揚げて会社に要求をつきつけ、働らく者の生活、平和を守り権利の拡大のため固い団結の下たゆまぬ前進をうけましょ!!

九月一日

××工業労働組合結成準備会

準備会のメンバーによる電撃的な攻勢は、会社の戦制を大混乱に落し入れてしまった。ある職制はメンバーの一人より、ピラ、組合加盟書を強制的に取り上げ、事務所へ持って行き、常務に報告し、ふだん労働者に顔を見せた事もないような職制までを総動員して組合結成の切り崩しに出してきた。「会社に組合が出来たらこの会社はつぶれてしまう」「だれがメンバーの中心か」とわめきちらしてきてきた。しかし準備会のメンバーは、会社の攻勢に対し

て一切答えず、逆に「組合結成に介入するのか」「不当労働行為をやめる」といって、ピラ、組合加盟書を強制的に取り上げた職制に対して、その場で自己批判書を書かせた。労働者の闘う決意に圧倒された職制は、顔面をう白になって、ふるえながらその場で自己批判書をかざるを得なくなり、ふだんは小馬鹿にしていた、現場の労働者に完全に屈服してしまった。自己批判書の最後には「今回の私の行った行為について、いかなる処分をも受けません」というおまけまでついていた。昼休みが終ったから、会社の重役が、労働者を一人一人呼び出し「中心メンバーはだれか」「組合をやめろ」と圧力をかけてきた。しかし労働者は「中心メンバーは全員だ」と答え、重役の個別呼び出しによる分断攻撃を粉砕していった。同時に、準備会のメンバーは職場にこの重役の攻撃に対し「呼び出しに応ずるな」といって労働者を説得してあたり、すでに呼び出されてしまった仲間に対して、全員で重役の説得、分断攻撃を粉砕していった。

電撃的な準備会による組合加盟は、労働者の力強い支持の中で××名の加盟者を獲得し、その日の夜六時から開かれた、××工業労働組合結成大会に成功裏に進んでいく。

組合結成大会は、上部団体のあいさつ、裁判闘争を闘っている仲間の連帯表明を受け、労働組合結成準備会からの経過報告、労働組合規約、当面の活動方針、執行部の選出の提案を、全員の拍手で確認した。ガンバローの歌を歌って、「××工業労働組合結成ガンバロー」を三唱する予定が、「団結万才」になってしまおうというハブニングもありながら、××工業労働組合結成大会は無事終了することができた。

3 要求の提出、団体交渉

労働組合を結成した次の日から、組合は1労働組合を認めろ、2組合事務所を作れ、3組合掲示板を作れという要求を会社につきつけた。会社は昨日の電撃的な我々の攻勢に腰を抜かしてしまい、その場ですべての要求を認める、しかし、会社は一方で「労使協議会」「労働協約の締結」へ団体交渉、争議行為の予告等についてののみを持ち出し、労働組合の骨抜きを狙ってきた。

組合側はこれに対し、大衆的な討議を昼休みに毎日行いつつ、一週間におよぶ交渉の中で、1団体交渉には原則として執行委員が参加する。しかし組合員の参加希望があり、執行委員会の承認があればだれが出席してもよい。2争議行為の予告については、組合がいつストライキを打つかは組合側の自主的な判断にもとづいて行うものであるという原則的立場に立って、会社側の提案を拒否した。

緒戦の闘いを勝利的に展開してきた組合は、労働組合結成大会で確認した七項目の要求書を提出した。七項目とは以下である。

××工業労働組合

当面の活動方針

- 一、身分差別制度の撤廃を要求します。
- (一) 月給制の確立の要求 (二) 家族手当の増額 (三) 住宅手当の増額の要求 (四) 危険手当の要求
- 二、賃金体系の明確化と大巾賃上げの要求をします。

- (一) 年令給の完全実施の要求 (二) 賃金格差の是正の要求
- 三、退職金制度の改正を要求します。

停年時五〇〇万円とし、具体的な規定の要求については、組合員と協議し決定します。

- 四、職場環境の改善を要求します。
 - (一) ロッカーの設置の要求 (二) 風呂の完備と女子用シャワールの設置 (三) 加工室、××室等作業室の防寒の要求 (四) エレベーターの修理の要求
- 五、福利厚生生の改善を要求します。
 - (一) 夏用作業衣の支給 (二) 食堂の設置の要求 (三) 娯楽室の設置の要求 (四) ××グループの割安利用
- 六、生理休暇有給の要求をします。
 - (一) 月二日を目標としますが、女子組合員と協議し要求を決定します。
- 七、臨時工の本採用化を要求します。

七項目要求は三の退職金制度の問題を残して、ほぼ全面的に要求を貫徹する事が出来た。

4 年末一時金闘争と

五日間のストライキ決行

年末に入って組合は、基本給×4・5割十一率20%、ただし勤評入査定V認めずの要求を会社側に提出した。組合はすでに95%以上の高率でストライキ権を確立していた。

臨時大会でのストライキ権が高率で批准された事を知った会社

側は、組合はストライキをやめろらしいというデマ？におどろいており、組合がストライキに突入する以前に倉庫より製品を選び出すと考えていた。11月×日、執行委員会と会社側との団体交渉中、突然会社側はトラック二台に製品を積もうとして、一部組合員とトラブルが発生した。

執行委員会は団交席上、会社側のキタナイやり方に対し、「話し合いの途中にこの様な事をするなら、組合はこれ以上会社と話し合う必要はない」事を通告して団交の席を離れた。

その日夜、ただちに組合員を集め、ストライキ実行委員会を結成した。ストライキ実行委員会を明日よりストライキに入る事を確認し、ストライキ実行委員会を中心に××名が会社に泊りこむ。執行委員会と職場代表によるスト実体は、ただちに戦術会議を開く、上部団体の役員がこの場に表われて、「ヘルメット、混棒を使用する様な戦術はまちがいだ」と我々の闘いの大衆的爆発をおさえようとしてきた。これに対して我々は「三池の労働者だってダイナマイトとズルハンで武装して闘ったじゃないか」と発言し一般的にヘルメット、混棒を否定するのはナンセンスだと主張した。この様な対立がありながらも、非組合員に対する説得活動は平和的に行う、たとえ相手側になぐられても、耐えるという事を全体で意志統一し、正門前、通用門、裏門の三ヶ所にビケをはる。

第一日目、スト突入を知らずに入社して来た非組合員に対し、組合側のビケ隊説得、ほとんどの非組合員、説得に応ぜず、重役と一緒に、近くの銀行の二階に待機している。組合側のビケが解かれれば、いつでも出勤する体制をとり続ける。

第二日目、スト実のメンバー全員会社に泊りこむ、夜、会社の

まわりにステッカーをはりめぐらす。又会社のまわりの住民に「ストで迷惑をかけるが、協力してほしい」というビラ入れを行う。△会社のまわりはほとんど住宅街のため▽

第三目、この頃よりビケ隊つかれがはじめるが、女子組合員によるたき出しが開始される。ビケ隊の歌は、インタードワルンヤワ労働歌、ガンバーばかりなので、組合員の中から、カラシンボタン等の歌がとび出すが、女子組合員から批判が出る。この日会社は社長名で「従業員皆さんへ」という告示を出す。又この日××地区の営業所の仲間が、寝ぶくろを持ってビケ隊に参加。

従業員皆さんへ

〃 告 〃

組合はこの度の賞与について、未だ話し合いの段階にあるにもかかわらず、全く一方的に何らの予告もなしに、実行力使をやりました。

会社は組合の設立と同時に常に円滑なる労使慣行の確立を希って、組合の言い分も精一杯聞いてきました。

この度の賞与についても、動評については、より以上の成績の良いものに報いたいという事では、マイナスする分を無くすという事を譲歩してありますにもかかわらず、組合はなんでも同じにせよと頑として一步も譲りません。より以上に成績を上げれば、これに報いるのは当然の会社の義務ではないでしょうか。

従業員の皆さん、会社はこれまでも従業員第一に考え、且

に行く。この日上部団体が、ビケ中に、音楽隊の派遣を一日三千円かどうかと言ったが組合員から「団結するのにならぬ金がかかるのだ、団結に金いらぬよ」とあっさりことわられる。この頃より労働者の中に「ストライキとは耐える事だ」との合言葉が發生、皆んな始めてのストライキであるがガンバル。

ストライキ中、団体交渉は毎日続けられていたが、会社側から最終的な案が出されてきた。「基本給×3.3割+動評」という内容であるが、組合が作られる前は、社員、従業員、臨時がそれぞれ格差をつけられたものを撤廃し、受給資格を従来の一年一ヶ月以上というものを六ヶ月に短縮する。又従来あったマイナス動評を廃止した。

この最終回答をめぐって、組合員の中には一律20%の回答が出ていないのと、ストライキ中の賃金カットをめぐって、スト続行を主張する部分と、事務所を中心とする妥結派へと二層分解し、全体集会では激しい討論が数時間にわたって続けられたが、一票投票の結果、賛成多数で妥結していった。

5 闘いはまだ続く

年末一勝金闘争は、5日間のストライキを打ち抜くという、画期的な闘いを闘い抜いたにもかかわらず、71年春闘は、スト権を確立したものの、執行部が決意を固めきれず、ストライキは不発に終わってしまった。しかし、会社は従来五月末の決算期に支払っていた「決算一時金」を経営不振を理由に出さないと宣言して来た。春闘の中で一時的に後退していた組合員は「決算一時金」をめぐってまたたび闘う決意を固めてきている。組合旗を会社の門

つ、会社の将来性も永遠なものとするべく努力してまいりました。

然るに組合はスト、ストで会社を脅かし、会社の誠意を全く無視した実行力行使に入りました。これから本当の会社の基盤を造らなければならない重大なる時、更に厳しい競争にあつて、この様な、組合の姿勢で、会社が成り立って行けるものでしょうか。将に、会社の重大なる危機であります。

従業員の皆さん、会社のこの様な重大危機を、御理解願って、呉々も良識ある行動に終始される様御願い申し上げますと共に、ひたすら円滑なる労使慣行の確立を希ってやまない次第であります。

昭和四十五年××月××日

社長

この様な告示が出された時、組合員から「社長は何も知らない」「トボケテル」「バカシテル」と労働者の不満を一層かきたた。第四日目、日曜日であったが、組合は出勤、ビケ続行。会社側は組合が寒いのでタキ火をしているのにイチャモンつけて来たので近くの消防署へ、会社構内と道路でのタキ火の許可をもらいに行く。

この日の昼、全員で映画会を開く、又争議中の組合より連帯のあいさつにくる。××地区の仲間がストに参加する。夜、酒、マージャンの禁止令を出す、泊りこんでいる組合員からの反発が強いので、12時に就寝する事を条件に認める。

第五日目、あいかわらず、ビケ続行。各職場の代表が給料を取り

掲げ、全員が団結のハチマキをしながら会社への攻撃体制を作りつつある。

「決算一時金」闘争の中から、若い組合員の手によって組合の機関紙が発行されてきた。組合の機関紙第一号は次の様に述べている。

闘う隊列に参加し

闘う隊列を發展させよう

私たち労働者は、組合温存主義を粉砕し、事実を明らかにし、真実闘う労働者でありたいと思います。たとえそれが少数であっても闘う隊列に参加しそしてそれを發展させなければなりません。組織温存を第一に考え内部の矛盾に目を向けることを避けるならば、組合の發展にはつながりません。私たち労働者は、組織内部にあるまちがった思想や行動を徹底的に糾弾し、正しい方向性をあたえてやらなければなりません。そのために離れていく仲間があつたとしてもしかたのないことです。分裂を恐れ組織温存するならば、それこそ大きなあやまちを犯すことになりす。

私たち労働者は、組織温存主義を粉砕して闘う仲間と手を結びあらゆる闘争の中で団結を強めそしてそれを發展させて組織の拡大をはからなければなりません。私たち労働者は、組織の外枠を考へるよりも、内部の闘う部分を発見しそれに参加しなければなりません。

私たちが労働者は、闘う隊列に参加し、闘う隊列を發展させようではないでしょうか。

◎実力行使は誰よりも雄弁家である！

◎労働者とは、人間であり、資本家とは、金の力に操られる人形である！

◎誠意は、待つのではなく、誠意はひきだすものである。

◎話し合いに幻想を持ってはならない！

◎相手が苦しい時の話し合いには真実性はある、

◎ゆえにストライキをバックにした話し合いでなければならぬ。

◎労働者はいつでも心をひきしめて闘う姿勢を持たなくてはならない！

◎資本家階級は少しのスキでもつけこんでこようとする。

◎闘うことがこれらを粉碎し、生活と権利を守る。

◎奴隷になるか、労働者になるかは闘うか、闘かわないかですべてがきまる。

われわれの沖繩闘争を！

マスコミ反戦 増田 秀次郎

— はじめに —

われわれマスコミ反戦が沖繩斗争を新たに闘う組織的準備にとりかかってから五ヶ月余の時間が流れた。

それは(1)六〇年代末葉のわれわれの沖繩斗争の思想的点検、(2)七〇年代斗争における「反戦」の任務、この二点を実践的に説明することを意味する。

この間われわれがなしたことは

一、沖繩斗争の「政治路線」を形成し、われわれの思想性、政治性をきたえること。

二、沖繩斗争を闘う大衆的戦線(共斗、連合)の構築の二点にまとめることができる。

七一年一月二日、われわれの友人である本郷地区沖繩斗争労働者委員会が行った「沖繩現地報告」や、一月二八日の「沖繩斗争討論集会」(富村支援・沖繩斗争東京行動委員会他主催)に参加し、われわれは沖繩斗争がスッポリ抜けおちている自己に気づ

くのである。

われわれは連続的かつ集中的な沖繩斗争討論をやりきることを決めた。沖繩人民の七〇年暮の「コザ暴動」国頭村米軍演習阻止斗争、七一年初頭の美里村毒ガス移送阻止斗争、全軍労ストに支援され、勇気づけられている自己をのりこえるために。

われわれは沖繩人民の闘いを一つひとつ点検するという手段をとった。「全軍労斗争」「毒ガス移送阻止斗争」などをとりあげ、レポートを決め、それを素材に討論するわけである。二ヶ月間継続(週二回)されパンフ「沖繩斗争に進撃せよ」として結実した。パンフは印刷所にまかせるのではなく、自分たちでカッティングし、印刷し、製本した(作ったパンフを熱心に売ろうとしな

いことがマス反の欠点のひとつである)。

われわれは在本土沖繩人民の闘う組織(沖青委や「離島社」など)との討論を行ったし、今後も続けていきたいと思っている。われわれは沖繩人民を被抑圧民族としてとらえ、「本土」人民を抑圧民族として、「沖繩人民無条件防衛」をとる部分、その逆の沖繩人民を「日本プロレタリアート」の一構成部分として把握し「日帝打倒」斗争の起爆力と位置づける部分、双方とも無縁

でありたいと願っている。

討論の過程で明らかになったことは、(1)沖繩について無知であったことを知ったこと (2)沖繩斗争とは「日本」との歴史的斗争であること (3)「現地斗争主義」的発想では最初から斗えないこと (4)にもかかわらず、ひとつの斗いを「理解」するには沖繩に行ってみなければダメなのではないかという感じ、などである。

二ヶ月余の継続討論でえたものは組織実践に移されねばならない。しかしいっただい何をやれるというのか。われわれは継続討論の中で獲得したものを公開の場であきらかにし、斗う仲間の点検にふしといねがった。こうして「四・二四沖繩斗争労働者政治集会」を準備した。

われわれがのぞみ、実現したいこと、それは「沖繩斗争」を日本の労働者人民の斗いの中に入れ、育てることである。

「沖繩斗争」は沖繩人民にまかせておけばいいという意見をきいた。沖繩斗争はしよせんカンパニア斗争におわるのだから自分の持ち場で帝国主義秩序解体の斗いをやる必要があるという意見もきいた。われわれも又カンパニア斗争の「むなしさ」をあじわっている。だからカンパニア斗争を内容において越える沖繩斗争を作り上げることがめざすのである。

われわれは沖繩人民の斗いに学びつつ、彼らの尻馬にのった「本土」的沖繩斗争を拒否し、われわれの沖繩斗争(思想と運動)を作りあげねばならない。沖繩斗争は「日本斗争」であり、アジア人民と結合する質をわれわれが本当にモノにする思想的な斗いである。沖繩を鏡にして「日本」を歴史的思想に照し出してみれる大運動を作りあげねばならない。

以上が「四・二四集会」で報告した内容である。

われわれは四・二四を踏まえ「沖繩斗争労働者共斗会議(準)」を結成した。それはいまだ連絡会議の段階である。ある人は水平連以下と批評してくれた。われわれは「七二年政治スト」にむけ準備し、それを基盤にあらゆる形態の斗いを作り出すであろう。

沖労共(準)の旗の下「四・二八」「五・一九」を百余名の隊列で斗った。ここに結集する諸団体は、情宣活動の組織的展開を前提として、「企業告発」「政治スト」「反軍産斗争」などを斗い続けるであろう。そして共同斗争の継続化をかちとるであろう。

自衛隊派兵・駐留が迫っている！
以上を踏まえ、次のピライ一八を読んでいただきたい。同志的な批判をのぞむ。

ピライ

沖繩闘争を構築せよ！

沖繩—マスコミ労働者の発言

マスコミ反戦連合委員会

ところが今一番重要視されねばならないのは体制側の「本土一体化」とともに労働運動の本土との一体化のもつ危険性だろう。おかしな話だけれども、うちの組合では本土での行動隊などにはあまり活動しない連中を送るわけです。そうすると触発されてきて積極的に組合活動をやるようになる。というのはこの連中が東京あたりに行ってきた感想をきいてみると「むこうではジグザグデモさえもやりきらない、社会党や総評はもうどうしようもない」と言っているわけです。つまりここでは活動しないものが東京に行って、現在の総評あたりの既成の革新運動の斗争もおきないようどうしようもない状態をみてきてそういう結論を出す。

自前の力で、一切の代行を許さず斗っている労働者兄弟たち！ 一月決戦、六月決戦、「七・七」華青斗決別宣言の中で、自らが切り拓いた斗争の高みの故に、現在の斗争を余儀なくされている仲間たち！

われわれマスコミ反戦は心から連帯のあいさつを同志諸君に送り、同時に七〇年代階級斗争の中心軸たる沖繩斗争を闘わんことを訴える。

七二年「返還」粉碎・自衛隊(日本軍)派兵阻止を、本土—沖繩人民の総決起として、どこまで徹底的に闘うことができるか—七〇年代斗争の鍵がここにある。

しかし、われわれは沖繩斗争をどのようにして斗えばいいのか？このことが現在深刻に問われている。回答はない。実践的にはもちろん、思想的にも。

われわれマスコミ反戦は「沖繩斗争」を闘うことを決意する。今は、沖繩斗争を闘うにあたっての諸前提をのべ、すべての労働者人民への闘いへの訴えとした。

1 自前の力でわれわれの沖繩闘争を

七二年にむけ、沖繩現地の斗争はますます高まり、爆発するであろう。われわれは、しかしこの自然発生的な爆発に期待してはならない。全軍労ストやコザ暴動に「乗っかる」ようではダメ。本土で、自前の沖繩斗争を作り出す努力を営々と継続すべきである。現在われわれはコザ暴動が斗われても、不十分なカンパニア斗争しかできない。なぜか？深刻な総括が必要である。

2 沖繩との連帯とは何か

沖繩人民は「自分たちは日本人である。しかし本土人とは違う」と語ると聞く。「本土人」は第一次琉球処分以降沖繩に対してたえず抑圧者として存在し続けてきた。歴史的に形成されたものとして、沖繩と本土との断絶は深い。われわれは軽々しくこの断絶をとびこえてはならない。そこには沖繩斗争はない。われわれは自からを帝国主義抑圧民族として沖繩（人民）に對峙してきたことを思想的に総括し、そして現在第三次琉球処分が急ピッチで進行している情況に對決し、その闘いの中で、帝国主義抑圧民族を解体することを自覚的に志向しなければならぬ。

3 書物主義を排し、沖繩人民の生活・矛盾をとらえる

沖繩斗争の方針（「奪還」「解放」「独立」etc.）はいろいろだ。共通していることは「書物主義」ということ。世界情勢から説き起こし、いろいろのべる。が、沖繩人民が一体何を要求しているのかを、沖繩人民と話し合い、沖繩人民の生活の苦悩、感情、歴史的に形成されてきた精神をとらえ、沖繩人民と討論し、いかに闘うべきかを提起した党派は少ない。

沖繩現地と「本土」では闘いの形態、戦術、獲得目標は必然的に相違する。このところを理解しないと「混乱」するのだ。「本土」の人はコザ暴動は理解できないのでは」と沖繩人民はいう。つまり、たえず基地の存在そのものによって生活をおびやかされ、基本的人権をはくただつされてきた沖繩人民の二五年に亘る米軍政への怒りを本土人民は理解できるのか、と問うている。

沖繩人民の米軍政（軍事植民地支配）に對するウラミは骨ズイに徹していることを、われわれは「理解」できるか。この点の理解なくして「復帰協」が領導してきた復帰運動の内実をみることができないのである。

沖繩の闘い部分（アジア革命斗争との連帯を沖繩解放斗争の基底にすえる部分）は六九年二・四斗争を「沖繩斗争の質的転換」と把え、復帰運動ではダメであることを鮮明化させてきた。しかし、それは「日帝との対決」の重要性を強調するとはいえ、反米斗争を軽視していいことを意味していいのである。

4 復帰協の破産

沖繩人民が「復帰運動」で表現しているものは何か。米軍政支配からの脱却であり、最低限の生活上の権利（基本的人権）獲得である。それは反米斗争として展開された。問題は、沖繩人民が自力で米軍政打倒の闘いを組むのではなく、日帝権力を「利用」して（くっついて）米帝支配からの脱却をめざした点にある。

われわれは、沖繩人民の「民主主義」「基本的人権」への渴望を理解しなければならない。それは歴史的に形成されたエネルギーである。本土では六七・一〇・八からポツダム民主主義への思想的挑戦をかかんに闘ってきた。これは大いに評価すべし！だからといって、沖繩人民の「民主主義」への渴望をべっ視していいということにはならない。沖繩には、いうまでもなく「戦後」はないのである！

米帝支配からの脱却（米軍基地解体・米軍政打倒）が闘いの主要な方向である。それを、復帰協は貫徹できない。本土政府にくっついて、やろうとするのだから、当然日帝権力、ブルジョアジーの反革命支配・干渉との闘いを放棄し、米帝支配からの解放を「異民族支配からの脱却」へと歪曲してはならない。七二年返還は日米両帝の沖繩「処分」であり、自力でこれを粉碎しようとする部分への解体攻撃なのだ。

5 革命権力の展望

沖繩現地の闘いは、復帰協ヘゲモニーの喪失、それを止揚する思想的・組織的結集軸の未形成という主体的情況の中で、しかしながら自前の力による日米両帝との闘いの段階に前進している。すなわち「権力斗争」へとつき進んでいる。ここに、「本土」のわれわれの闘い如何によって、沖繩を頂点とする日本プロレタリア革命権力の創出という展望が具体性を帯びて与えられるのだ。

6 具体的な闘いを

イ 「沖繩」を闘う大衆部隊—大衆的統一戦線を作ろう

「労働争議」を戦斗的に闘っている仲間たち！個別斗争を、帝国主義国家権力との斗争へと不断に思想的に再構成することが必要ではないか。また、職場でへなげ沖繩斗争を闘わないか！討論を組織しよう！労働者の沖繩を闘う共斗会議を作ろう！

恒常的な闘いで七二年総決起へ！

今は、「沖繩」をめぐる日米両帝との政治的緊張関係を創出することが大切。学習会、討論集会、街頭宣伝、行動（米帝大使館、基地）などで「沖繩問題」を大衆化しよう！

(七二・二・一五)

△ スケジュール

- 第3回富村公判
3月2日 P.M 1時東京地裁
- 沖繩斗争活動者会議
2月26日(金) P.M 6:30
於 中野工房(384) 2456

ピラ2

招 請 状

自前の沖繩闘争を創出せよ！

「沖繩の重要性」を提起してきたのは、いうまでもなく沖繩人民の闘いであり、アジア革命斗争の前進である。「本土」プロレタリアートはこれに対してどのように答えてきたのであろうか？
沖繩人民は、「七二年返還」攻撃に対して、彼らが永らく呪縛されてきた「本土幻想」を自から突破し、「草の実を食ってでも」自分たちの力で最後まで闘う意志を固めつつあるとき。

その中に、われわれの「沖繩斗争」が何であったかが示されているのだ。

「本土」プロレタリアートは、いま新たに「本土」における沖繩斗争固有の闘いを創出するかがつきつけられている。われわれの解放斗争にとって沖繩斗争は一体いかなる「位置」せしめるか。このことを具体的実践を通して鮮明化すること、われわれはこの課題に賭けること宣言しておきたい。

「沖繩闘争」の位置 I

日米共同声明（六九年）を読んでも沖繩はみえてこない。われわれは「沖繩斗争」の主体である沖繩人民の意識の内部、沖繩の沖繩としての形成（歴史）過程の秘密まで立ち到ることがせまられている。沖繩の「特殊具体性」の認識が必要なのだ。「六〇年代型沖繩斗争論」はこの点を欠落させてきたことを知らねばならない（一方では、「本土」革命派の闘いの必然として、それは把握されねばならない。）

「沖繩」がわれわれにせまるのは、「日帝確立の支柱」、「日米両帝と人民の矛盾の噴出点」であるからだといわれている。それはそうだ。しかしそれでわかったつもりになってはならない。

われわれは沖繩の歴史過程を重視する。沖繩の固有性、独自性を。彼らがいいう「日本国家を相対化する思想」を、われわれの沖繩斗争の中にしっかりと具体化せねばならないと考える。沖繩斗争の中でわれわれは自からを相対化し、「日本」人としてのわれわれの存在様式を解体せねばならない。

沖繩はこのような「質」をもっていることを認識せねばならない。このような思想内容を獲得することによって、われわれは初めて「沖繩」を自からの闘いとして創造できるのである。

「沖繩闘争」の位置 II

沖繩人民は日米両帝の「琉球処分」を、ひとつひとつの闘い（全軍斗争等）の中で対決している。米軍基地の再編強化、日帝の反革支配介入の交錯する中で沖繩人民のいかりは「コザ暴動」として噴出した。自からを権力主体として形成するのかそれとも沖繩県民として「豊かな」経済作りにはげむのか。後者が虚妄であることは沖繩に基地がある限りはつきりしてしま

う。
「コザ暴動」「全軍斗争」は、沖繩人民が自からの権力を打ち立てるまで日米両帝と永続に闘うことをはっきりさせた。「本土」において沖繩斗争はどのように闘われるか。このことがつきつけられている。

政治闘争の新しい創造をめざし……

われわれは沖繩闘争を闘う戦列を強化せねばならない。沖繩闘争は「政治闘争」であり、全人民的な課題である。しかし、今問われているのは帝国主義の政治過程を暴露する闘いではない。「全国政治闘争」の新しい闘い方を創造することが問われている。

われわれは「生産点」「地域」の矛盾と「沖繩闘争」を結合させることをやり抜きたいと考える。ぶっちゃけて言えば、沖繩闘争を主軸に労働運動を「革命化」することを主要な課題として追求する七二年に向けて、「政治スト」を徹底的に組織することをめざして闘い抜こうではないか。

沖繩闘争労働者共闘会議に結集せよ！

われわれは、以上を踏まえ「沖繩闘争労働者会議」の結成を、闘う労働者兄弟諸君に提起したい。

独自に各自の「場」でなにかをやり切ること、各々の闘いをひっさげ結集。その大衆的な集約の場としての沖繩闘争労働者共闘組織の形態、質はわれわれがいかなる運動をなしえ、いかなる思想を獲得するかによって規定される以外にない。

すべての労働者諸君！ 沖繩闘争に進撃せよ！

以上をもって、われわれはすべての労働者兄弟に沖繩闘争への決起を訴え、かつ沖繩闘争労働者共闘会議への結集を呼びかけたいと思います。

その第一回目「準備会」を

四月十七日夜六時

真正会館 六号室 (中央線・信濃町駅下車並。TEL三五一一一六八五)

にて行ないますので、是非ご出席していただきたいと思ひます。

七一年四月八日

マスコミ反戦連合委員会

(三八四)二四五六

南部青年戦線

(四四七)一七三六

ピラ3

われわれの沖繩闘争創出に向けて

4. 24沖繩闘争政治集會に結集せよ！

われわれの沖繩闘争個有の内容を創出せよ

マスコミ反戦連合委員会

日米帝国主義との矛盾を直接的に体现している沖繩人民の怒りは「コザ暴動」を突破口に国頭村米軍射撃演習阻止斗争、美里村毒ガス移送阻止斗争、全軍労働斗争、「七二年返還協定」調印阻止斗争へと噴出する。これらの闘いは同質性をもつものではなく、それどころか矛盾を含む闘いであるが日米帝国主義の蛮行、帝国主義権力による「世直し」に根差す点において共通性をもつ闘いであり、「復帰運動」として闘われてきたこれまでの闘いの枠外に突き出るものである。

すべての働く仲間たち！ 闘う労働者兄弟諸君！ われわれは「本土」においていっただい沖繩闘争を作り出してきたであろうか。われわれの闘いの中に沖繩はいかなる位置をしめているのか。卒直にいつ「沖繩の重要性」を最もよく認識しているのは帝国主義日本の政治局代表佐藤榮作ではあるまいか。今沖繩人民は「本土」プロレタリアートへの幻想を捨てさり、日米帝国主義に最も深く抑圧されている沖繩人民の存在からしてみればこのことはきわめて困難な、重いことなのだ！ 自分の方に頼って米軍基地解体・米軍政打倒の闘い、日帝打倒の戦列を打ち固めつつある。沖繩人民は決意している。「草の実を食ってでも最後まで闘う」と

同志諸君！ 「本土」におけるわれわれの沖繩闘争の戦列は決定的に不十分である。どうしたことであろうか？！

沖繩人民が自らの力で着々と前へ進んでいるのに対してわが「本土」ではそれに呼応した闘いを創出しえていないことをきびしくみつめねばならない。「激動の三年間」の中で形成してきたわれわれの「反帝国主義と実力斗争」はいま沈滞しているが、いったいどんな回路をたどって復権していくのか。

われわれマヌコミ反戦は「本土」での沖縄斗争個有の内容を創出することに全力量を集中する。その中で、われわれの思想と組織の改造を追求するであらう。

われわれにとって沖縄闘争とは何であるのか

斗争仲間たちにとっても沖縄は遠く離れているようである。それは「地理上」の問題ではない。われわれの思想と政治の次元での問題として。ベトナムは遠く離れていたか。そうではあるまい。われわれのグロレタリア階級形成をみるに、ベトナム革命戦争は背中合わせに存在していたといえるのである。「三里塚」も然り。

しかし「沖縄」はわれわれの現在の中の闘いの中にスナリと入ってこないというのが実状なのではなからうか。われわれにとって沖縄とは何であり、沖縄斗争を創出するとは何を意味するのだろうか？

第一に、沖縄人民こそ日米帝国主義との矛盾を活きた形で体現し、日米帝国主義の暴力的支配・抑圧と闘っていること。

第二に、日米帝国主義はアジア反革命支配体制の確立に向けて、沖縄を軍事要塞として強化し、沖縄社会を解体し、沖縄人民の生活を破壊し、沖縄を含む形で「日本民族」を権力政治的に始末せんと現実的に進めていること。第三に、「本土」によって、第一次琉球処分以降、沖縄人民は収奪される対象としてのみ存在してきたのだが、その支配・被支配の歴史性。すなわち「本土」支配階級の階級支配は「沖縄」（在日中朝人民）をひとつの支えとして貫徹される構造であること。

われわれは沖縄斗争を現在展開、持続されている諸斗争の政治的中心点をしめる闘いとして位置づける。日本帝国主義が、「沖縄処分」を中軸に日本総体を始末する攻撃を沖縄―本土人民にしかけていることをよく認識しなければならぬ。「沖縄斗争」とはわれわれの闘いである。われわれは、沖縄人民の闘いと別のところで、「本土」における沖縄斗争個有の内容を創出することによって、この帝国主義の側からの「日本」始末を解体しなければならぬ。

われわれはもちろん「沖縄も本土も抑圧、搾取という点では同じである」という平板な認識をとらない。帝国主義権力、資本家階級による攻撃は「本土」と沖縄では異質であり、人民の「階級形成」はそれぞれ違った回路を辿って獲得されるであらう。「沖縄無条件返還」を唱える人は沖縄が身近に見えているように実は何も見えていない人のいうことである。沖縄の戦闘的な労働者たちは、沖縄としての異質性に立ち、闘いの思想的な構築を堂々と継続しつつある。その直截な形として「本土拒否の思想」／＼国家を相対化する思想／＼が提起されているのだ。それは知識人の観念遊戯ではない。沖縄人民が「国家幻想」をのりこえ、本当に最後まで日米両帝国主義との闘いを持続させる力の源泉の追求なのである。沖縄人民が「国家幻想」

沖縄斗争は沖縄人民の闘いに先導され、沖縄人民の闘いを基点とする「日本国家解体」の闘いとして展望される。それはま

た「本土」プロレタリアートの帝国主義抑圧民族解体の闘いとして貫徹されねばならない闘いである。

4・24 沖縄闘争政治集會に結集しよう

すべての働く仲間たち！ 斗争同志諸君！ あなたは沖縄をどのように考えているのか。沖縄斗争を創出するにはどうしたらいいのか。われわれはすべての諸君にこのことを問い、共に行動しつつ考えることを訴える。

個別的には闘いは散成している。われわれは考える——個別の闘いを持続的に深化させつつ沖縄斗争を創出せよと！ すべての闘いを沖縄斗争に集中させ、帝国主義そのもの闘いの潮流を創出せよと！

あらゆる戦線に沖縄を軸とする政治的緊張関係を作り出していかねばならない。「沖縄問題の重要性」を説明し、沖縄人民の闘いを伝え、きみが何故沖縄斗争を闘うのか——このことを三千万労働者に語る事が大切なのだ。四・二四沖縄斗争政治集會はその第一歩を踏み出す行為である。すべての仲間たちは結集し、意見を出し、沖縄斗争を闘う労働者政治部隊を深く広く作り出していく決意を打ち固めようではないか！

沖縄闘争労働者共闘會議（準）への結集を

さまざまな「沖縄斗争論」が溢れ、具体的な沖縄斗争が創出されていないのはよくないことだ。沖縄人民の苦斗を感受できないのはよくないことだ。われわれは実践的な斗争（沖縄）が継続されていない現在の状況を危機とみる。沖縄斗争を闘わんとする者は沖縄斗争労働者共闘に結集せよ。

われわれは、①具体的な行動目標を設定し、②持続的・日常的に ③七二年沖縄政治ストの創出に向け、闘いを進めていくと思う。

抽象的一般的な「全国的政治暴露」の闘いとどめるのではなく、街頭カンパニア斗争へ流すのではなく、労働運動の革命化に向けてわれわれの行動を集約していくのである。

現在結集している斗争団体は、マヌコミ反戦、本郷地区沖縄斗争労働者委員会、南部青年戦線、川崎青年戦線、石油化学反戦、全国電機社研××支部、コザ斗争救援委員会、その他。斗争労働組合、諸団体、個人の結集を！

主催 沖縄斗争労働者共斗会議(準)
 時間 四月二十四日(土) 午後六時
 場所 金属労働会館大議室(四六三)四二三一
 (渋谷駅下車徒歩五分)

ヒラ4

レジュメ

4. 24 沖縄闘争労働者政治集会への問題提起

沖縄斗争労働者共斗会議 (準)

(1) 沖縄闘争は70年代階級闘争の政治的中軸である

一、七二年沖縄返還は日米帝国主義によるアジア人民、沖縄人民、日本人民への攻撃である。

(i) ベトナム解放戦線を核とするアジア革命戦争の攻撃的前進と米帝国主義を中心とする反革命勢力の敗退。グラム・ド

クトリン(「ベトナム戦争のベトナム化」)「アジア人によるアジア人同士の戦争」。日米帝国主義同盟の質的再編・強化(日帝の「肩代り」)「アジア革命戦争に対する反革命権力要素としての全面的登場」。「アジアの盟主」へのステッ

プ。
 (ii) 日米帝国主義同盟による日帝「確立」。米帝の軍事的指導下における日帝のアジア「反共」諸国に対する政治的||経

済的ヘゲモニーの貫徹。日帝の反革命軍事力の未形成

(iii) 日米「韓国」台湾の反革命軍事枢軸の形成

以上(i)(ii)(iii)が帝国主義体制による「沖縄の重要性」確認の意味である。

二、「第三の琉球処分」としての七二年沖縄返還

(i) 日帝による沖縄「植民地化」の継続強化

(ii) 八国境√確定による日本人民、沖縄人民の排外主義イデオロギー、大國ナショナリズムへの動員包摂

(iii) 沖縄の日米「共同」支配体制の確立。七二年自衛隊の沖縄侵出と沖縄基地の日米共同使用、管理↓日帝の反革命軍事

力の形成。自衛隊の帝国主義軍隊化。

(iv) 沖縄社会経済の帝国主義的改篇(沖縄の独自性||戦斗性の解体)

(a) 本土「憲法」秩序による沖縄人民の抑圧管理体制の確立

(b) 労働運動の右翼的一体化

(c) 独占資本の沖縄進出。「東南アジアへの進出拠点」

「アジアの規模での労働運動」(同盟・滝田、鉄連・宮田)

三、反・アジア反革命戦争の方向で沖縄斗争は貫徹される。

アジア人民にとって七二年沖縄返還とは日米帝国主義同盟の強化によるアジア反革命支配秩序の再建を意味し、日帝の政治的||軍事的な反革命支配干渉を意味する。沖縄人民にとっては、「第三の琉球処分」差別支配の強化を意味し、日帝権力による植民地的な収奪抑圧を意味し、強権的な八存在√抹殺・生活破壊を意味する。それも、アジア反革命戦争への直接的な動員という形で。

われわれ「本土」プロレタリアートにとって七二年返還とは何か。「沖縄処分」による安保||日米帝国主義同盟の再編の強化であり、日帝の帝国主義確立の要である。

日帝権力、資本家階級の「アジア再侵略」体制の構築は深く広く築かれている。日帝は自力で「戦後」を総括しつつあ

る。入管法による「入管体制」の強化、四次防、自衛隊の沖縄侵出による反革命軍事力の形成、斗う部分への破防法攻撃を軸とする徹底的弾圧（思想それ自体を裁くという形で）、帝国主義的労働運動の育成、等々

これら帝国主義政治動向の集約が沖縄処分なのである。帝国主義の牙はアジアへ向けられており、アジア革命戦争の波及をどのように阻止し、解体するかは帝国主義権力政治は集中され、そこに帝国主義の未来がかけられているのだ。

われわれはそれ故沖縄闘争をわれわれ「本土」での諸闘争の政治的中心点として位置づけるのである。そして、反・アジア反革命戦争として斗うことがわれわれの沖縄闘争を切り拓く方向として確定されねばならない。

(2) われわれの沖縄闘争個有の内容を創出せよ

一、沖縄闘争は「日本国家解体」の斗いである。

(i) 日帝権力、資本家階級は沖縄を含む形で「日本」あるいは「日本民族」の世直しを行ない、われわれを始末しようとしている。別言すれば、「沖縄処分」を通じて全日本の帝国主義的改造を進めつつある。

牙はアジアへ向けられている。沖縄はその岩（日米帝国の反革命拠点）の役目を果さねばならないものとして改造されているのだ。

沖縄における人民の斗いは直接的に米帝のアジア反革命支配をゆるがし、日帝の「アジアの盟主」の野望を粉砕する斗いであり、日本人民の斗いの要石（キ・ストーン）となる。

今沖縄人民の斗いは噴出してきている。七〇年末のゴザ暴動。国頭村米軍射撃演習阻止斗争。美里村毒ガス移送阻止斗争。これらの斗いは「復帰運動」を超える質を作り出している。それは生活を丸がえした斗いであり、退路を断った斗いである。

沖縄人民は、本土プロレタリアートとしてではなく沖縄人民として斗いをやりとげようとしている。

「復帰運動の痛苦な総括。われわれは「本土復帰」の中で沖縄人民がいつた何を求めたかを理解しなければならぬ。それは巨大な米軍基地、米軍の軍事植民地支配からの解放のねがいを推進力としていたのだ。沖縄の人民は自分たちの力の微力さゆえに「憲法」下の日本に復帰し本土プロレタリアートとして米帝打破、基地解体の戦いに進むという「廻り道」をとったのである。」

沖縄闘争は日米帝国主義の「沖縄処分」を粉砕する斗いであり、沖縄人民の斗いを主導力とし、基点とする沖縄本土プロレタリアートの「日本国家解体」の運動だ。日本国家、日本民族を、沖縄を頂点とする革命権力と帝国主義権力

に解体する持久戦である。それは同時にアジア革命斗争と連帯する斗いである。

ここにわれわれの諸斗争の中で沖縄斗争が政治的基軸としての位置をあきらかにする。

二、われわれの思想の核としての沖縄

日帝支配階級は戦前戦後を通じて沖縄を日本民族から分断し、「棄民化」した。敵支配階級は沖縄を「日本の中の植民地」として差別支配することによって本土プロレタリアートへの階級支配を貫徹しえたのである。本土プロレタリアートは帝国主義抑圧民族として形成されてきたのだ。

沖縄人民が「われわれは日本人かもしれないが、本土人（ヤマトンチュー）とはちがう」というのも以上のべた歴史過程に根差しているのだ。（このことを無視して沖縄斗争を最後まで斗うことはできないにもかかわらず、これまでの沖縄斗争はこれを欠落させて来たのである。）

われわれは、沖縄斗争を本土において斗うとき、沖縄人民との「断層」をかるがるしくうめてはならない。日常不断に日本人としてのわれわれを対象化し、相対化しなければならぬ。

われわれは沖縄人民の斗いを基準にわれわれの思想「戦後民主主義」に支配され、風化されてきた生活、思想を点検し、改造していくのである。

(マ) スロシ反戦発行のパンフ「沖縄斗争に進撃せよ」頁六八〜頁七一参照

沖繩闘争に進撃せよ

マスコミ反戦等一三団体・二〇〇人が結集

四・二四沖繩斗争政治集会

みずからの沖繩斗争の構築を、マスコミ反戦連合委員会と南部青年戦線が代表呼びかけ団体となって開催された四月二四日(土)の政治集会は、全都の労働者二〇〇人が結集し、要約下記のような問題意識の共有を確認し、今後の共斗体制強化へ向けでの第一歩を踏み出した。

問題意識 (要約)

- (1) われわれは沖繩斗争が七〇年代階級斗争の中軸として存在し、「七二年沖繩返還」とは日、米両帝国主義によるアジア人民・日本人民への攻撃にほかならないことを確認する。
- (2) しかしわれわれは、沖繩斗争を「日米共同声明」からのみ説きおこすことによって、政治論として一般化させることにはあきらまない。なぜなら、沖繩には本土とはまったく異った個々の歴史が存在することを知るからである。
- (3) これまで沖繩人民は、「本土復帰」という言葉によってしか語らなかつたにも拘らず、沖繩人民の具体的斗争は基地撤去・米軍支配からの解放を目ざしていた。一方本土の労働者の言う「沖繩返還」なる言葉の内実は、多くを帝国主義的ナショナリズムに依拠していた。
- (4) 沖繩における「復帰」の対語として本土における「返還」を対置させることの決定的誤りを、われわれは自覚する。いま沖繩人民の斗いは、日帝による国内再編||沖繩丸がかえ政策に対しはつきりと「本土拒否」の思想による「生活ぐるみ」斗争として展開されている。われわれは本土||沖繩の間に存在する斗争の質の差異を安易にとびこえることよりも、われわれ自身の思想を深め、われわれ自身の斗争を築きあげていくことを選ぶ。
- (5) 在本土労働者の斗いは「三里塚」や個別労働争議において噴出しているが、それらの多くの斗いの中軸に、われわれは、

「沖繩斗争」を据え、個別斗争の中で沖繩斗争を日常・不断に斗いぬかねばならない。

沖繩闘争全都労働者共闘会議(準)結成

右記のような問題意識をもって、己れ自身の沖繩斗争の深化と拡大をかちとる為に「沖繩斗争全都労働者共闘会議(準)」が参加各団体と個人によつて結成された。これは、労働者の真に沖繩斗争を闘う部隊を目指し、みずからの斗いの中の沖繩斗争をもちよる為の機関として発足させたものであり、「カンパニア動員」あるいは「アンチ党派」の集団としてはない。とりあえず、「四・二八」には独自の隊列を形成し、街頭デモンストレーションを行うが、われわれは決してデモによつてのみしか沖繩を闘わないのではなく、個別生産点での斗争課題、あるいは地区斗争の中の課題(矛盾)の中からみずからの沖繩斗争を構築するだろう!

「栄えある現場主義」の伝統を、われわれは沖繩斗争によつて止揚し、「街頭」でも「生産点」でも斗い抜くであろう。

矛盾の中から日本国家を拒否する 沖繩人民の闘いに学ぶ

☆ 一〇〇名余の結集をもつて、共闘会議の第一歩を即す!

二四日、渋谷金属労働会館大ホールに於いて一三団体、三〇〇名余の労働者、市民、学生の結集をもつて開かれた共斗会議は

マス反、南部青年戦線、富村支援沖繩斗争東京行動委員会、沖繩青年委員会等の問題提起を受け、四、二八の共闘行動を出発点に、月二回の会合、斗争の報告(沖繩斗争通信)紙発行、そして何よりも自前の斗争を基点とした共同行動を追及することを確認、七二年沖繩処分紛争に向けて総力を上げて闘うことを宣言した。

☆ 矛盾の渦中から、復帰運動の限界をのりこえて闘う人民の蜂起

全軍労の熾烈な闘いに於ける「見矛盾したスローガン」、「解雇反対」と「基地撤去」、解雇に反対ならその職場、米軍基地の存在を許すのが、否である。「解雇」するならその基地をなくして土地を返せ、という声に表わされる如く、基地経済の中で他に働く職場がなく、今、ベトナム人民殺しに協力させられ、アジア人民に対する反革命軍事基地維持の為の能率化、合理化、首切りの本質を見抜き、「草の実を食べても」、その生活の凡にかけて、米軍政権力と、日米共同声明路線の実体化日本帝国主義の自衛隊進出、帝国主義軍隊に反対して徹底した闘いを闘っている。それはAサイン業者を中心とする市民が「市民の生活を守れ」「ビケ反対」と称してテロにおよぶ日本人民同士の矛盾の中で苛烈に闘わざるを得ない。

又、毒ガス移送阻止斗争に見られる如く、「毒ガス即時撤去」と「移送阻止」それは単純に「安全性」が確認出来れば、移送OKという簡単なものに集約出来ないものであり、マスコミが唱った「安全であれば早く移送するように協力すればよい、村民はそうすればよい」などと黙って運びこまれ、今後も搬出入確認保障の何もない基地そのものの存在を無視した主張には大きな不信をつきつけざるを得ないのだ。それは屋良政権に対する不信でもあり、本土から来た調査団に対する徹底した憤怒である。それは自衛官を含めて調査団派遣を許した日本本土人民に対する不信でもある事も確かである。一見矛盾した運動の叫びの中から彼らをとらえて離さなかった米軍基地の存在そのものの心臓部につきささる闘いが、それに伴う日本本土政府の帝国主義的抑圧の歴史がオーバーラップして、コザ暴動の時、口々に伝えられた「次は黄ナンバー(本土人の自動車プレート)だ」に象徴される抑圧と差別をはねかえさんとする闘いに必然的につながってゆかざるを得ない。

我々は沖繩人民によつて、安易な連帯が拒否されていることを先ず知ろうではないか。沖繩を帰せ、という唱和のみでは権力構造を一切抜きにした運動では一体化路線の中で、又もや我々は帝国主義の同伴者として立ち現われざるを得ない。日米帝の侵略路線下、矛盾したいや日本国家を対象化し、その根を撃たざるを得ない沖繩人民の闘いに全てを学び尽せ。

4・28 五月ゼネスト 72年処分紛争に向け本土労働者の総決起を克ちとれ!

4・28 午後六時 日比谷公園噴水前沖繩闘争労働者共闘会議(準)旗の下に結集せよ!

沖繩闘争に進撃せよ!

働く仲間たちノ、闘う全ての労働者兄弟諸君ノ

われわれ「本土」プロレタリアートにとつて沖繩はいつたい何なのか。沖繩人民が最も闘う連帯を求めている現在われわれの闘いと日常の中に沖繩はどのような形で存在しているのであらうか。

ある者は語る 「本土、沖繩を貫く闘いを作りだそう」と。

沖繩人民は「本土」プロレタリアートとの安易な連帯を拒否することから自からの闘いの砦を新たに築きはじめた。

そのことはわれわれ「本土」労働者にとつて何を意味しているのであらうか。沖繩人民の抑圧の具体性にせまろうとせず、沖繩の「歴史過程」の本質にせまることができずに一般的に「沖繩斗争勝利」を語り続けてきたわれわれの闘いへの鋭い告発がなされているのである。

この自覚をぬきにして「本土」沖繩を貫く闘い」と語るときわれわれに沖繩は見えているのであろうか。

沖繩闘争個有の内容を創出せよ

一、沖繩人民こそ日米帝国主義との矛盾を直接体験していること、その闘いのリアルな(具体的、感性的)認識が確立されねばならない。毒ガス移送阻止斗争の時、美里村民の中に「無理心中の思想」がめばえた。全軍労の労働者は「基地解体の

ためにこそ基地労働に踏みとどまる」地点に自己を置かざるを得ない。われわれはこのことに全意識を集中しなければならぬのだ。

二、日米帝国主義によるアジア反革命支配秩序の再編強化のために「七二年返還」が進行されている。「第三の琉球処分」。「沖繩人民にとって、それは「差別支配」の継続強化であり、「日本の中の植民地」の拡大強化である。

われわれにとって「七二年返還」とは何か。日本の帝国主義「確立」(アジア「反共」諸国への政治的・経済的ヘゲモニー貫徹。日帝の反革命軍事力形成)のカナメだ。

三、沖繩人民は国家的規模での「処分」(沖繩人民への根こそぎ的抑圧収奪差別支配)と斗っている。「本土」プロレタリアートの一構成部分としてではなく、沖繩人民としての立場に徹し切ることを決意しつつある。それは日帝国家権力のみならず「日本人総体を含む」の差別支配、米帝の軍事的支配の「歴史過程」に根差す必然とわれわれはとらえる。

四、沖繩人民の斗いは「本土」労働者にとって「日本民族とは何か」を実践的につきつける質を作り出している。沖繩を「日本」に組みこむことによって支えられてきた本土での階級支配の構造をあばき出すものである。われわれには見えてくることとの困難な階級支配の暗い部分を照し出す斗いである。たとえば「戦後民主主義」による階級支配の構造。帝国主義抑圧民族としてのわれわれの在り方。

われわれは「沖繩」(歴史的に形成された)「矛盾」、沖繩人民の斗いを基準鏡としてわれわれの生活、思想、斗いを検証し点検していくのである。

五、沖繩斗争は、沖繩人民の斗いを主導力とし基点とする「国家解体」「帝国主義抑圧民族解体」の持久戦である。

六、沖繩斗争はわれわれとアジア人民、アジア革命斗争を結合させる道である。

二 沖勞共(沖繩闘争労働者共闘会議・準)に結集せよ

斗う全ての同志諸君! 働く仲間たち!

四月二四日、われわれは「沖勞共(準)」を結成した。結集した仲間はマスコミ反戦、南部青年戦線、石油化学反戦、本郷地区沖繩斗争労働者委員会、コサ斗争救援委員会等十三団体(沖青委 富村支援東京行動委員から「連帯」のあいさつ)問題提起を受けた。

これといえる具体的な斗いを、われわれは作り出しえていなくことを白状する。われわれは先進的の同志たちの斗いに学びつつ共に斗うことをやり抜きたいと思うのだ。沖繩斗争を闘う労働者部隊の創出、労働者階級の中に沖繩斗争の戦列を打ちか

ためること、これ以外にわれわれののぞむものはない。

具体的な獲得物を定めてカンパニア斗争を展開することも恐れない。それ故にこそ、「カンパニア動員組織」を自力の斗いの持続化によって一歩超えてることをねがうのである。

沖勞共(準)の「行動綱領」は

一、沖繩人民、在本土沖繩人民(例えば「沖青委」と)との「交流」を深め、批判・自己批判による緊張関係を作り出すことをめざす。

二、各団体、個人は独自の斗いを継続し(ピラ一枚まくことでもいいのだ!)その斗いをひっさげて沖勞共(準)に結集する。また自己の置かれている場(生産点、地域)の矛盾、斗いと結合させ、「沖繩斗争」の日常不断化をめざす。

三、七二年「政治スト」の貫徹に向け準備する。沖繩を生産点にもち込むことを意識的に行ない労働運動の「革命化」を追求。「大衆運動の原則」を守り、発展させる諸君にわれわれは心から訴える!共に沖繩斗争を闘おう!

われわれは以上の「展望」(組織的・思想的)のもとに本日「四・二八」斗争を貫徹する。沖勞共(準)の斗いの第一歩として。

マスコミ反戦連合委員会
沖繩斗争労働者共闘会議(準)
事務局連絡先

中野区中野三ー四〇ー三〇 ナカノ工房気付(三八二)二四五六
新宿区三栄町六 好栄荘三号室 (三五二)二三九一

記

第一回「沖勞共・準」代表者会議開催について

議題 1 四・二八斗争の「総括」と五・一九斗争への準備について

2 各団体の今後の斗いと沖勞共・準の共同行動について

日時 五月五日(金)午後六時 場所 真生会館六号室(中央線信濃町下車 駅並び

TEL(三五二)六八八五

沖縄斗争通信 番外編 1 発行 マスコミ反戦連合委員会

中野区中野三丁目四〇一三〇ナカノ工房気付

5・17 沖縄労学集会に結集せよ!

主催 沖青委

沖青委(在本土沖縄人民の斗争組織)が「返還協定粉砕ノ五・一九全島ゼネスト貫徹」にむけて集会をもつ。「本土における沖縄労働者の戦線」を全ての領域で築き、展開する第一歩の斗いとして。

沖青委の青年は断言する (六九年)二・四ゼネストの破産は斗争大衆の強固な自立によって乗り越えられている、と同時に「しかしながら沖縄現地の斗いは本土労働者の無自覚、無関心によって、孤立無縁的に進行している」と。

斗争全ての同志諸君へ われわれは沖縄人民の斗いと「本土」プロレタリアートの斗いの「落差」をはつきり認識しなければならぬ。沖縄人民の斗いを孤立無縁に追いこんだものは一般的な「無自覚」ではない。沖縄にかかわる「本土」プロレタリアートの方法を手直しすればすむというものではないのだ。われわれが沖縄に関心を強めればよいのではなく、これまでの「関心」の持ち方それ自体を改造することがせまられているのである。

沖縄は「本土」プロレタリアートから思想的に疎遠のまま放置され続けてきた。街頭で「沖縄斗争勝利」を叫ぶデモの隊列が走りさつて行き、日米帝国主義による「第三の琉球処分」は着実に進行していった。ちがうであろうか? 七一年の「四・二八」がそのことを表わしている。沖縄が気になる労働者、学生、農民二万三千は困惑といらだちの表情で冗舌なアジの中で「沈黙」して行くのであった。「沖縄斗争」を持久的に斗争思想的・政治的な基軸が不鮮明なのである。われわれ「本土」プロレタリアートの斗いの中に沖縄はどんな位置をしめているのか。

われわれマスコミ反戦もその例外ではない。少しばかり余計に沖縄が気にかかっているのにすぎないのだ。そのことを具体的な行動によって表現したいと思っていること、別言すればわれわれは「戦争によって戦争を学ぶ」行き方をとりたいと思う

のである。

沖縄人民の斗いは「大衆の強固な自立」の様相を示している。七〇年暮の「コザ暴動」をみよ。へ復帰による沖縄人民の斗争の買いあげを拒否し、帝国主義日本(国家、日本人)へ米軍政との食うかくわれるかの斗いに突入した。沖縄人民にとってこの斗いはサツマ以来の「日本」の支配・抑圧・収奪に屈服してきた沖縄の歴史を清算しえるかどうかの最後のチャンスであり「日本」に対する復讐の斗いである。矛盾を引き裂かれる沖縄人民の退路を断つ斗いはへ日本プロレタリアートに思想的・政治的に包摂されることを拒否しむしろへアジア性を心の支えとして強化されていくであろう。これは沖縄人民の「日本人」に対する異質感だけから帰結するものではないであろう。沖縄人民の「階級形成」がいかなる方向性で獲得されるのかという時限での問題である。在本土沖縄労働者のある人は「日帝打倒」を沖縄人民の戦略と定め「日本に革命が起きてソビエトが樹立されても、沖縄の怨念は残る」と語った。われわれは、六〇年代末葉の本土での「沖縄斗争」がことばのちがいはあれ右のようなものでしかなかったこと、そのことの総括がいま求められていること、ここからはじめねばならないのである。

富村順一氏は「沖縄の真の希望は国政参加でもなく、本土復帰でもない。アメリカの軍隊が沖縄より去り、アジアに平和が来ることである」という。

われわれは斗いの出発点に富村さんの思想を据えたいと思う

問われているのは「日本人」として沖縄斗争をどのように闘うのかということである。これまでの沖縄斗争は日帝打倒の突破口として沖縄人民の斗いを位置づけ、きわめて政治主義的に展開されてきた。沖縄は燃えている「本土」にその火を持ち込め式のものであった。それはわれわれ「本土」労働者の斗いを天上の高みに据え「本土」労働者のへ指導の下に沖縄人民の斗いを組み込もうとした。沖縄県民へプロレタリアートの二構成部分ととらえ日帝打倒の起爆力と位置づける。これは帝国主義の思想を完全には打破しえていない発想ではなからうか。

沖縄人民の「強固な自立」は彼らの「本土幻想」の根を断ち切る斗いの中からちとられたことを忘れてはならない。

一つの結語

沖縄闘争はわれわれが反帝国主義か一國主義かまきびしく検証する。それは、われわれの思想力をフルに求める。

沖縄斗争(沖縄人民の斗い)を基準に、われわれは帝国主義憲法秩序を喰い破りつつそれに深く規定されてきたわれわれの斗争主体としての形成、その限界を明らかにして行く。それを「思想運動」として自己完結していくのではなく、具体的な行

動の新しい展開を追求する中で。

われわれにとって沖青委の諸君と話し合い、討論することは、だから、「沖繩人無条件防衛」を唱えるということではなく、みずからの沖繩斗争への創出への不可決な作業である。「本土」プロレタリアートにとって七二年沖繩返還は日帝確立の要として①反革命軍事力の形成、②帝国主義抑圧民族の形成（八国境確定による排外主義ナショナリズムへの「日本人」沖繩人の包摂）を意味し、その具体化としての自衛隊（日本軍）進軍、駐留、基地の「共同」管理、使用、司法・行政・教育の本土支配秩序との「一体化」、労働運動の一体化が着々と進められている。目には目を、歯には歯を。われわれ「日本人」は忘れやすい民族である。支配・抑圧に「慣れ」やすい民族である。正確には、ナショナリズムを思想的土壌としてこそ、インターナショナルナリズムにも無えんであった。権力の思想とそれへの服従となれ、いや沖繩はわれわれには見えな「日本」の暗い部分（アジアの問題をはじめとする）を照射する斗いの質をつくり出すであろう。それをどう受けとめ、どんな斗いをつくりだしていくのか。

沖繩人民の闘いに学びつつ「本土」での沖繩闘争個有の内容をつくりだそう

総評は復帰協の「県民無視の返還交渉粉砕」「完全返還」「平和で豊かな沖繩県作り」を要求とする五・一九全島ゼネストに「連帯」する全国統一行動を云々している。生産点ストと集会、デモ。われわれは、本場に既成の労働運動を解体してこうとおもうのなら、彼らとは明確に異なる政治内容・思想内容を鮮明に打ち出していかねばならない。いまわれわれが沖繩五・一九ゼネストへの連帯ストを作り出せないのは、組合青年部を握っていないことが原因ではなく（これはむしろ結果だ）われわれの思想が遅れ主体性（能動性、計画性、意識性）がないからである。われわれは、だが、悲観しない。七二年政治ストにむけ準備を、政治ストを基礎に創意工夫ある斗いを、労働運動の革命化を、

◇ 沖 労 共（準）に 結 集 して 共 に 闘 お う ◇

- ◇◇◇◇◇ 五・一七集会 午後六時 場所 中央労政会館ホール（国電、水道橋下車。後樂園ジム隣）
- ◇◇◇◇◇ 放映「それが島だ！」 基調報告・沖繩青年委員会
- ◇◇◇◇◇ 五・一九沖繩全島ゼネスト連帯・返還協定粉砕・調印実力阻止中央総決起集会
- ◇◇◇◇◇ 午前五時三〇分 於清水谷公園

沖繩返還協定調印阻止に決起せよ！

NET・NTV全労斗

マスコミ反戦連合委員会

マスコミー出版戦線で闘い抜いているすべての労働者兄弟諸君！

沖繩返還協定調印が目前に迫っている。座してこの挑戦を迎えるのか、否か。われわれはいま、重大な歴史的、階級的試練にさらされている。沖繩のプロレタリアート人民は、コザ蜂起を発火点として国頭、美里の斗い、全軍労スト、そして五・一九全島ゼネストへと怒濤の進撃を開始することをもって、帝国主義者の挑戦に回答を叩きつけた。沖繩人民の斗いは「屈辱の沖繩史を人民の手で精算する」偉大な事業である。

苛酷な米軍政と闘うことを通して構築された沖繩人民の斗いは、いま、日本帝国主義総体に対する斗いへと転化せんとしている。いわば「本土」に対する斗いである。沖繩を米帝支配に割譲することをもって「保障」された「戦後日本」そのものが告発されているのだ。

「本土」沖繩闘争の構築を！

「本土」におけるわれわれの斗いが、この厳しい指弾から免れ得るものではないことは明白である。沖繩を米帝支配のもとに放置し、敵に用意された土俵の中でのみ形成されてきた「本土」プロレタリアートの斗いが、その内実、限界性を徹底的に検証されるのは理の当然だ。それゆえわれわれ本土プロレタリアートに沖繩人民との連帯を言葉で語ることは許されない。われ

われの道は只一つ、「戦後民主主義」体制に死を与えること、帝国主義国家体制解体の激烈な闘いのみである。日帝が現在押し進めている本土―沖縄一体化政策の反革命性の最大のポイントは、日本階級斗争の最強の砦である沖縄の外濠、内濠を埋める作としてあるということである。本土秩序に吸収、一体化することで沖縄人民の怒りを拡散させ、沖縄斗争に打撃を与えようとする帝国主義者の陰謀をわれわれ本土プロレタリアートは、その再生をかけて破産させねばならないのだ。かつて鉄鋼を失い、炭労を失った日本労働者階級が、沖縄斗争を軸に再びその戦闘性を回復しうるか否かが問われているのだ。

闘うすべての労働者兄弟諸君！

七二年沖縄返還政策の展開は、日帝確立の最も重大な要となつてゐる。自衛隊は帝国主義軍隊としてその位置を確立しアッア侵略への第一歩を印す様になる。国内抑圧体制はそれに伴い、飛躍的に強化されるであろう。

沖縄斗争は、帝国主義との闘いの全ての集約点として歴史的な位置をもつてゐる。個々の戦線で大胆に沖縄斗争を提起し、なし得る最大限の行動を追求しよう。そのことを通してわれわれの「沖縄斗争」を構築しなければならぬ。一步一步沖縄斗争の戦列を打ち固めること、これ以外にわれわれのできることはない。

すべての労働者兄弟！

☆ 沖縄斗争の戦列に自らを投ぜよ！ 沖縄返還協定調印阻止に決起せよ！

☆ 五・三〇、返還協定調印阻止労働者大集会（明治公園・十二時）に結集せよ！

|| すべての労働者は、沖縄斗争労働者共闘会議（沖縄共）に結集せよ！ ||

一九七一年五月二九日

マスコミ反戦連合委員会

TEL (三八四) 二四五六

沖縄斗争に進撃せよ

マスコミ反戦連合委員会

1. 72年「沖縄返還」と沖縄「国政参加」粉碎斗争・他
6. 富村順一氏支援斗争

沖縄斗争方針（試案）

¥ 200

連絡先 中野区中野3-40-30 ナカノ工房気付

(TEL) 381-2456

レボルシオン社でも取扱っています。

5.3 集会の報告

金属労働者 金 田 昇、太

その他各地方での闘争を担う諸団体の決意表明をばっすいして紹介します。

マルクス・レーニン主義青年同盟

本日の集会を出発点とし、団結して反米帝、反日本軍国主義と闘い、俺たちの国土をあらすものとは断固として闘う。沖繩の反米コザ暴動を断固として支持する。三里塚農民の徹底した反政府闘争を支持する。学生の反米帝、反日本軍国主義闘争を支持する。敵と味方の問題、理論斗争方針の問題は激しい階級闘争の実践の中で解決していくべき問題である。それはこの間の実践の中で克ち取って来た教訓であるし、四・二八北九州集会の教訓、五・三集会のような団結こそ我々のぞむものであり、工場労働者、農民と結びついて最後まで闘う。

日本共産主義青年同盟・東京都委員会

全国の青年学生の団結した基調報告を支持する。現代は革命の勝利する時代であり、プロ文革、インドシナ、沖繩、三里塚とめざましい闘争の発展がある一方で日本軍国主義が復活しつつあるが、復活しても分子のトラにすぎない、しかしながら我々はその

五月三日、国労会館において、十八都道府県二四団体三〇〇八参加をえて、「反米帝、反日本軍国主義」全国青年学生総決起集会所が開かれ、全国の「毛派」と云われる部分の団結をおし進める軸を一つには持ったこと、「反米帝、反日本軍国主義」のスローガンのもとに広範な人民の統一戦線を闘いの中から創り上げる事を確認した。その諸団体の様々な主張を、この機関誌をかりて報告したいと思います。

議長選出と基調報告のあつた後に、特別報告として

一、沖繩からの報告

二、長浜合板労組の闘い

が紹介され、沖繩の報告を行った代表はこの間の沖繩における人民の闘い、コザ暴動、国頭村、美里村の闘い、全軍労スト、など一連の闘いをおしなべて反米暴動であり、当然の闘いであること、米軍は沖繩人民をばかにしているが、沖繩人民はかならず米軍、米帝に打か勝つ事、五・一九沖繩ゼネストに向けて全島一丸となつて反米闘争の高揚を作り出していることを報告した。又長浜合板労組の代表は、いま闘い抜かれて長浜合板の戦闘的なストライキ闘争を参加した多くの労働者に報告して圧倒的な連帯の拍手をあびた。

ヘリ子のトラにも充分注意しなければならぬ。

本日の集会には重大な意味がかかっており、反米帝、反日本軍国主義を打ち出した正しい青年学生の方向がある。人民大衆に結びつき、人民大衆と団結して革命闘争を推し進め、青年運動の分裂状況を克服していかなければならない。

全世界人民との国際連帯をすすめること。

日共修正主義のうりあるいて排外主義をうち破らなければならぬ。

最後に、本集会以の今後の任務は、本集会の克ち取った成果を全国の青年学生に呼びかけていかなばならぬだろう。

和光大三里塚闘争共闘会議

我々も毛沢東派の三里塚における恒常的な現闘体制が不完全にしかなく、わずかにML同盟の人たちが現闘本部を設けているにすぎないこと、そうした自己批判の上に各大学全共闘の中に三里塚闘争を闘い抜く戦線を構築していかなければならず、全国人民に対する弾圧を推し進めようとしている敵権力に対し、打撃を与えること、日共修正主義の依拠している基盤は条件派にあり、反対同盟の闘いに敵対して来ている我々は最後まで三里塚闘争を闘うことにより、権力の策謀を打ち砕いていく。

龍角散・ヤトロン白鳥千秋君を守る会

龍角散、ヤトロンで働く白鳥千秋君が、遅刻・欠勤が多いという理由で解雇されたのが昨年の九月。彼は組合活動を積極的に行っていました。その為上司との対立が尖鋭化していました。又

当時会社は合理化、新工場設置の問題を目前にして何がなんでも彼をじやまな存在としており、いとも簡単に彼の首を切つたので、彼は職場にもどると、ただちに職場の労働者に自分の不当な解雇を訴え、その為御用組合も問題にせざるを得なくなつた訳だが、この労組の対応もしかし会社を支持することで、白鳥君を組合から除名し応えるという反動的、会社と一体となつた弾圧策で自からの延命を計る以外になかった。このような反労働者策動にもかかわらず、龍角散、ヤトロンでは、「龍角散・ヤトロン、白鳥千秋君を守る会」を結成し、真の労働組合運動を守り、拡大していく目的で闘争の飛躍を克ち取るうと備えている。

岡山私鉄反戦労働者

日本原自衛隊基地撤去闘争を闘い抜いている岡山私鉄反戦労働者の闘争報告、日本原基地ではこの間八〇〇名の部隊が戦車、実弾演習を行なっており、この三月二三日姫路特科連隊の自衛隊が派遣されて来ている。この日本原では町議会議が、明治憲法復活決議を下すという反動的な地盤を持つている。我々は町議会議に対する糾弾闘争など様々な工作を行って来たが、弾圧も激しくなつて来ている、我々は今後の目標として、日本原を中心とする広範な労働提携を結び、又、日本軍国主義の先兵たる自衛隊員に対する工作の問題を先頭になつて担い切っていかなばならないと考える。

柏崎原発反対同盟

東京電力の原発設置に対して近在の労働者、住民が反対して立ち上り、現代的に運動の一定の後退を余儀なくされてはいるもの

の、土地買収問題に対し、刈谷村の農家のおつかあ達が土地買収に對して立ち上がり、今なお、わずかであるが反対同盟の用地を死守してがんばっている。

我々は原宥の排出するブルトニウムが自衛隊の人殺しの道具になることを確心して、最後まで闘い続ける。

東 部 労 組

東部労働組合の結成から七〇年の戦闘的組合運動を標榜し、労働者の高い目標をもった闘いへの導びきとその革命的エネルギーの存在の確認をなしとげ、経済闘争から政治闘争へ結合させていかねばならない。

我々はこの集会において新たなものを克ち取つていこうと考える。又労働者と生死を共にする観点、労働者の中にある矛盾を革命に転化する観点を絶えず持つていなければならぬとも考える。最後にこの場に結集した諸君と断固連帯する。

日中正統中央本部・大森氏

本集会に關して次の三点を確認する。

- 一、斗争のなかから生まれ、結集したものである。
- 二、小異をすてて大同を取る、を実践的に克ち取つた。
- 三、理論と闘争を真面目に推進して闘い取つたことを確認し、現在の状況のなかで我々のなすべきことは一つにはアメリカ帝国主義の状況分析、ニクソンの足下から資本がくずれていること、アメリカの現在の不況が戦争から来ている事、階級闘争としての黒人の闘争他様な運動があること、アメリカ人民は優秀な

人民であることからみて、状況は我々にいま圧倒的に有利である。しかしながら我々闘う人民の戦線をみれば、反米帝・反日本軍国主義のスローガンがありながらも、前衛集団が一つに結集していき、いまこの集会がその先弁をつけたところを痛感している。この集会を支える観点としては、一致できる所から闘争すること、実践からそれを理論化すること、を確立していくことであると思う。反米統一戦線の一貫として日中友好運動を位置づけ、私は闘っていきたいと考える、そして皆さんと最後まで団結して闘う。

日中友好協会（正統）穂積七郎氏

今日までの大衆運動を阻害してきた派閥あらしを自己批判し、清算して新たな運動の出発点を創り上げねばならない、中間の裏工作を粉碎し、自然発生的に表われている日中友好運動を組織していく。

反米帝、反日本軍国主義の広範な統一戦線を大衆運動を核としてやり抜く。

関西公立大学職員有志グループ

闘いの報告

全共闘非難キャンペーンを代々木がはつた時、大学に働く労働者として何をすべきかという討論から入つて、教職員と全共闘学生との共闘、大学立法が出た時点での共闘を通じて、統一した闘いを組んでいった。当然反動的代々木の対応との対決の中でしか大学における管理支配の強化との闘いも組みえなかつた。

大学側の清掃義務合理化（守衛をふやすという攻撃にあいながら

も、闘い抜き、ひとつの主体の確立という観点で、反権力の主体は闘争の中から生まれること、闘いの主体を創り上げねばならないこと、労働者、大衆に對する責任を持つこととしての出来る主体を創り革命の前衛党を創らなければならぬこととして確認した。

以上の他に、労働者解放戦線が七番目に発言し、「反米・反日本軍国主義全国青年学生総決起集会への私達の見解としてレジュメを出しているので後程掲載します。」又日航労働者闘争同盟、反米反軍国地区高校生協議会、五・三集会広島県実行委員会、人民解放会議労働者グループ、毛沢東思想研究会、反帝平和青年戦線、尼ヶ崎青年労働者グループ、北部反戦労働者行動委員会、広島青年学生グループ、日中友好（正統）佐賀大支部、マルクス・レーニン主義人民連帯組織準備委員会、等の団体、村松一人氏、ジャーナリスト同盟の小林氏などの個人参加を加えた発言があり、全体の圧倒的拍手をそれぞれうけていた。その他当日発言しなかつた団体、個人を含めて、五・三集会の方向性を確認し、後程行なわれた、実行委員会において、具体化の方向性を含めて確認していくことの討論がなされた。

一つには連絡センターを具体的闘いを交流させていく情報交換の場として、又各地での闘いを全国化する交流紙のようなものを作り、編集委員会を東京の同志が担うこと。の二点において設置する。

二つめには基調報告の五項目

一、反米帝反日本軍国主義の政治方向を大胆に打ち出す全国で始めての青年学生集会としてかちとり、反米帝反日本軍国主義

斗争として闘い抜くこと。

二、反米帝反日本軍国主義の広範な統一戦線の一翼としての青年戦線の結成のため。

三、全国の青年学生の認識の一致をかちとる為努力すること。

四、全国各地での先進的闘いを学び合い、報告し合つて交流を深めること。

五、この集会のとりにくみ過程と今後の闘いの中で、各地において反米帝反日本軍国主義の闘いを前進させること。

以上の五項目の確認を行ない、意志一致した。我々の今後の方向性も、大胆に積極的に打ち出す事で、運動としての内実を持つた統一戦線の結成として、維持、発展させていかねばならないだろう。

最後に日比谷公園までの戦闘的デモを克ちとつておえた。

1. 本日の集会参加への私達の決意

全国各地から結集された同志、友人のみなさん！

私達は日本帝国主義の暴圧に抗し、闘いを続けている同志、友人のみなさんに連帯します。

ここに結集されている同志、友人は、毛沢東主義の旗を掲げている戦士です。「底辺」の労働者、学生がお互いの斗争報告を討論し、高い目標に向つて努力するという非常に意欲ある集会です。私達もその一員として参加出来ることを光榮に思っています。

毛沢東主義が日本階級斗争に登場してからまだ非常に日が浅い

ことは確かです。しかし、確実に闘う人民に毛沢東主義あり、は全国に広がっています。毛沢東主義こそ文字上の学習ではなく闘う道具であり、革命実践であります。実践を軸に毛沢東主義者が一堂に結集する。こんな素晴らしいことはありません。「片手に語録、片手にソロバン」はどうもいけません。「底辺」の労働者には関係ないことです。「片手に語録、片手に人民の武器」の「底辺」の労働者階級人民の闘いを創りあげることが先決です。その為に頑張り続けましょう。

私達はこの間の斗争報告と、同志、友人のみなさんの闘いを学習して参加しました。徹底した実践を軸に「経験を含括」する作風を全体で確認しましょう。それがスタートであり、真の毛沢東主義者の革命的態度であります。

「底辺」の労働者階級人民の革命的実践を軸に、毛沢東主義を全ての人民へ！

実践の「経験を教訓化」し、政治的自覚を高めあい、同志、友人のみなさんと階級的友愛とより鋭く日本帝国主義を追いつめる闘いを推し進めよう！ 私達もその一員として、闘いを続けたいと思います。相互の批判の中から、切れずと離れぬ階級性をかちとりましょう！

2. 整風運動こそ全ての革命派の任務！

私達は「整風運動」を展開中です。中国共産党が幾度もくり返した「整風運動」を私達は学んでおります。それは七〇年代の重

みを反映しております。順調に伸びてきた新左翼、その中で唯一武装軍団を先頭に、他の党派が試みることのなかった組織の総力をかけた「六月決戦」を闘った私達に「整風運動」を要求しております。

私達の「整風運動」は全ての革命派の任務であると思います。ここで整風をやり新たな思想を創造できるか否かは重大な問題であります。「六月決戦」「七、七華青斗告発」こそ、それであります。ここを素通りするより不真面目な党派は必ず人民からの信頼を失墜するでしょう。

整風こそ真の毛沢東主義者の当然の混乱であります。私達は、その整風を、幹部批判（路線、党内民主、幹部の生活態度）を全面的に展開、各人の自己総括、点検を通して、より高い階級的組織的団結をかちとり、全ての組織員が突きあつた壁をブチ破らんと努力しております。

整風こそ、階級的友情の数千倍の回復であり、最も虐げられた人民の大衆運動を構築すること、全ての人が労働に参加して、悪しき学生風の作風を根本的に思想改造することであると思っております。そして私達は、人民への信頼と運動への推進の中から思想斗争を断呼としてかちとることを目標にしております。以前の新左翼のやり方ではいけないと感じておられる同志、友人のみなさんもおられると思います。私達の組織が混乱したのは、確実にみなさんの無言の重みが私達の自己満足を粉碎してくれたのだと思っております。私達は人民の信頼に応えるべく、整風運動を展開中であります。いまだシッカリしたものは提出できません。しかし、みなさん！ 私達の経験を「他山の石」として、私達

に注目して下さい。必ず実りあるものを得るでしょう。その期待にそうべく頑張りたいと思っております。みなさん！ 革命運動は真に難しいものです。しかしそのカベは革命派人民の相互批判の展開の中から必ず克服できるものと思っております。革命派総体に整風運動を！ 真の友と団結し、敵をコナゴナに粉砕する最前線に立ちまわらしましょう。

私達は「六月決戦」で百余名、六七年以来の斗争で多大な逮捕起訴者を出しております。毛沢東主義者が日本革命に与える功績をもっともつと自己犠牲し、革命的英雄主義をださざる闘いを続けよう！

3. 「七〇年代」の言葉こそ人民の攻撃

宣言！

武装軍団は人民の大海の中で泳ぎまわることが出来る。その人民の大海も、ただ先駆的な運動のみによって生まれるのではなく、私達自身が深く大衆に入り、一步一步政治的自覚を高めあい進まない限り、絶対に出来ないことを学びました。

真に「大衆の中から大衆の中へ」であります。「七〇年代」こそ「長征」であります。階級的矛盾からのがれえぬ人民の中で工作をする。その日常性の中から人民の大海をつくりだす。頭ではなく肉体であります。肉体もろとも矛盾が集中している人民に依拠しなければならぬと思っております。

学生運動が労働運動、農民運動に波及し、革命的インテリゲンチヤが労働者、農民の中に入りつつある。このことは確かであり

ます。私達も、その学生運動主流から労働者、農民運動主流の時代に生きています。その反映のひとつが「整風運動」であると思っております。

私達の社会には階級矛盾の存在と民族矛盾の存在があります。資本家と労働者の矛盾と日本民族と被抑圧民族の矛盾であります。これは通り抜けることのできない事実であります。「七・七告発」がそれを象徴しております。革命主体たる労働者階級人民は、自らの闘いを勝利すること、自らの階級的任務を絶対に忘れてはいけません。それは自らを犠牲にしてまでも解放される人民を支援する世界的な任務でもあります。

日本の社会は確実に「人民」が人民を支配する欺満的民主主義体制の中にあります。それを一つ一つ打ち破り、暴露していくに長じていなければなりません。労働者が労働者階級たる主体を回復するということは、自らの解放と階級的任務を併せ持つ主体力をつけなければならないということです。革命の大衆運動を構築する中から武装軍団を創り出し「大衆の中から大衆の中へ」のフトコロに深く迫る長期工作を実現する、階級的矛盾深き場所へ恒常的、日常的闘いを続ける。日本労働者階級人民の解放の必要不可欠な課題は階級矛盾と民族矛盾を克服する中から「万国のプロレタリア、被抑圧民族団結せよ！」の立場を踏みかためることであると思えます。

矛盾ある人民の苦悩の中から、「入管体制粉碎」「沖縄解放斗争」「三里塚斗争」の地歩を固めよう！

私達は全国全戦線で、三里塚青行隊や、全軍労青行隊を創り出すなければならぬと思っております。

「人民ただ人民のみが世界の歴史を創造する源動力である」ことを実現するための党組織を完成しなければならぬ。「人民に服務する」大量の階級的集団を結集させなければならぬ。私達のセクト性は打ち破らなければならない。闘いの中で真の友と真の敵をみい出すことに私達の目的があるかぎり……。

「七〇年代」の言葉こそ人民の攻撃宣言です！ 権力者をおびやかす七〇年代を私達とみなさんの力で創りあげましょう。私達は三里塚に現斗本部を置き、労働者は、七二年沖繩返還協定粉砕生産点政治ストライキを目標すべく「沖繩斗争労働者共斗会議」を創り、四・二八にその雄姿を登場させました。その他、全国全戦線で人民の決起を準備すべく闘いに進撃しております。私達は「整風運動」を貫徹し、巨大な人民の総決起を必ず実現したいと思っております。

4. 反米帝・反日本軍国主義の具体的行動をおし進めよう！

私達は本集会の目標、1. 闘いの報告、2. 認識の統一、3. 反米帝反日本軍国主義の統一戦線、4. 恒常的な組織体を創ることに賛成であります。

私達は念をおしておきたい。それは毛沢東主義はあくまでも実践！ 認識！ 再実践！ 再認識の連続です。その中以外に毛沢東主義者を見い出すことはできません。それを是非確認し、相互の批判と思想斗争を断呼として進めたい。更に、統一戦線はコレダという目に見えるものが見えにくいものです。言葉上の共斗宣言では

ダメです。あくまでも具体的行動が軸になることです。今一つは革命的諸党派、諸団体の統一戦線も「底辺」の闘いと敵の明確化を常に念頭に置いておかなければならないと思います。形式ではなく実をとりいれた統一戦線を組まなければならないと思う。

1. 反米帝、反日本軍国主義の具体的行動を各地区各単産で進める。その「経験の教訓」を何らかの形で全体化していく。
2. 大衆斗争機関に積極的に共斗を呼びかけ、実現し、広大な統一戦線を創る。
3. 真の友と団結し、真の敵を粉砕することに常に心を配る斗争を続ける。
4. 集中した攻撃を行う。拠点化した斗争に押しかけ敵に打ち勝つ、そして拠点斗争機関は逆オルグを派遣し、全国の同志に斗争を知らせる。

みなさん！ 以上のことを提起します。私達は、真の毛沢東主義者との出合を喜びます。労働者階級の誇りにかけて持久的に、たて続けに、休まず、連続して斗争を進めよう。

「革命的大衆運動の主流はよい方向である」
 「主要な傾向は革命である」
 「革命によって戦争をおしとどめ、戦争によって革命をひきおこす」

毛主席の偉大な指示を日本労働者階級人民は全て実現しよう！
 一九七二、五、三

71. 5. 15	反米帝 反日本軍国主義	刊号	(連絡先) ○三(八三二一六九〇二)
	全国青学闘争連絡センター	準備	東京都足立区保木間三八七一
	ニユース	創	の十二の四〇六
		準	関 征史

五三集会の勝利によって前進しよう

同志のみなさん！

五月三日、我々は反米帝反日本軍国主義全国青年学生総決起集会を闘いの集会として勝ちとつた。この集会は、十八都道府県二百七十余名、二四団体の参加のもとにひらかれ、団結の気運あふれる中で、全員が次のように確認した。

- ・ 米帝と日本軍国主義に反対する日本人民の闘いの先頭に立つ。実践を通じて、団結を強める。
- ・ 反米反軍の旗のもとに、全国の青年学生を統一し、団結をつよめ、青年戦線をきざきあげていく。
- ・ 労働運動の右翼的再編を粉砕し、労働者階級の中に深く入り、底辺からの運動をもり上げる。
- ・ 各地の農民の斗争と連帯を深め、労働同盟をきざきあげていく。
- ・ 日本軍国主義者の侵略戦争に対しては、それを革命に転化していく。
- ・ 日共官本修正主義集団の反革命性を暴露し、粉砕するために闘う。
- ・ 青年学生運動は、人民解放斗争の防衛隊であり、先鋒隊である。過去もそうであつたし、現在もそうであるし、この後も、その任務を荷いさるために奮闘しよう。

集会では、以上の団体が発言した。

日航労働者斗争同盟、マルクス・レーニン主義青年同盟、反米反軍地区高校生協議会、日本共産主義青年同盟東京委員会、労働者解放戦線、和光大三里塚共斗会議、五・三反米反軍広島県実行委、竜角散ヤトロン白鳥君守る会、岡山私鉄反戦労働者、柏崎原子力

発電所建設反対同盟、人民解放会議労働者グループ、毛沢東思想研究会、反帝平和青年戦線、尼崎青年労働者グループ、東京北部反戦労働者行動委員会、東京東部労働組合、広島青年学生グループ、日中（正統）佐賀大支部、関西公立大職員有志グループ、ML主義人民連帯組織準備委員会（以上 発言順）

集会では次の方々が発言された。

松村一人先生、小林義雄先生、大森真一郎先生、穂積七郎先生

特別報告として、「沖繩から」と「長浜合板斗争」が行なわれた。

この集会は、全国の各階各層人民の支持と参加の下で斗われ勝利した。集会後行われたデモは、機動隊の弾圧をはねかえして斗われた。

総括会議の申し合せ

会議は十五団体の代表と各日中（正統）会員、三〇名の参加でひらかれ次のことが確認された。

- (1) 五・三集会は斗いの集会としてからとられた。
 - (2) 今後、各地の諸斗争を一層団結させ、反米反軍の斗いをおしすすめよう。
 - (3) 全国的に斗いの経験を学び合ひ、この中で認識の一致をすすめよう。
 - (4) 総括を徹底的にまき起こそう。
- 今後の任務の一つとして、連絡センターをもうけることをきめた。

連絡センターについて

このセンターは五・三集会の五点の意義を保障するものとして、各地の斗いを全国化していく。またつくりだしていくために奉仕する情報センター的な連絡機関である。

このことが成果をおさめていくには、各地の皆さんの斗いの報告が、日常的に手紙でおくってもらえるかどうか、またカンバも集中してもらえるかどうか、にかかっています。皆の力で、センターを支えて下さい。個人でも、グループでも、センターに手紙を下さい。

当面、五・三集会の総括・感想・その後の斗争報告を六月上旬迄にどんどん送って下さい

次号からは、このニュースを内容のあるものにしていきたいと思えます。

(なお、連絡については、私書箱のあいているのがないため、当面、表記のところをつかいます)

「水俣」を見て思ったこと

建築労働者 西田 進

一、"怨"と私との隔たり

一とあり見て、まず最初に思ったことは、水俣病患者あるいはそれをとりまく人々を映画の中で見ても、それほどの感激はなかったということです。何人もの患者を紹介しているのですが、卒直に云つて、心の底からの憎しみはわいてこないのです。又彼らの気持が、どうしても理解できないのです。私は映画を見る前から「水俣」のことは知っていました。水俣病の根源である「チン」を打倒しなければならぬ、更に資本主義を打倒しなければならぬと、思っていました。そのように階級形成されているから「そんなものだろう」とまで思うのでしょうか？結論を云うと、「帝国主義打倒」というスローガンを単に、観念的に、絶叫あるいは信奉しているのみでは、問題の解決は全然はかられないのではないかと、ということですが、例えば「水俣」の人達に、「チン」が悪、更に資本主義を打倒しよう、いくら叫んで見た所で、相手にさえされなさいやないかと思えます。又「何云つてんだ、ばかやろう」とさえ云われると思えます。彼らの「怨」と私の間には、もうどうしようもないくらい隔りが存在していると思えました。「怨」という言葉は、そんなに底の浅いものではなく、

もつともつと深い意味のことだと思えます。私自身の今までの階級形成の過程を振り返って見ると、それこそ頭の中で、資本と労働を強引に定規づけ、頭の中のみでだけ帝国主義打倒と、それこそ盲信していたのではないかと、思っています。それだけで民衆の苦しみ、憎しみ（水俣をとりまく人達）をどのように、共有化し、どのように運動体化するのか、つまり革命の暴力を引き出すのか、ということに常に考えなければならぬ者としては、全く不十分だと思えます。ややもすれば、こちら側の一方通行になつて空回りしないとは限らないと思えます。又、利用主義的なものが、入ってくる危険が非常に大きいと思えます。最低限私のやれることとしたら、「水俣」のことをより多くの人々に伝え、そこにおける資本主義的矛盾を何回も何回も、それこそしつこくやっていくというぐらいだと思えます。後は、民衆の創造性、戦闘性等に依拠すべきだと思えます。決して引き回しをしてはならないと思えます。あるいは、引き回しがうまいかからないからといって「消耗」するようなことは、全くバカげたことだと思えます。昨年末の例の株主総会（「チン」資本糾弾集会和云うべきでしょう）に、ある八派の党派が、ヘルメット姿で「参上」した所、大衆に批判されしめ出しを食つたという話を聞いたことがありま

す。そのようなものに顕著にあらわれるてこすりとも思えるおしつけがましい「指下」（彼らにしてみれば指下と思つているのだらう）は改めざるべきだと思えます。おしかけ斗争とはそんなものをさすのでは断じてないと思えます。一とあり見て思ったことは以上のようなことです。

帝国主義打倒云々ということで、全てを合理化してしまふ思想的腐敗、墜落の危険性は常につきまわっていると思えます。毛沢東主席は次のように云つています。「人間の正しい思想はどこからくるのか。天からふつてくるのか。そうではない。もともと自分の頭のなかにあるのか。そうではない。人間の正しい思想は、ただ社会的実践のなかからのみ生まれてくるのであり、ただ社会の生産斗争、階級斗争、科学実験という三つの実践のなかからのみ生まれてくるのである。」人民戦争路線、あるいは大衆路線という未知数のものに向つて、持久的な実践を共に行っていきたいと思いません。私のことに關しては、今後の永続的実践活動の中に於いてこつばみじんに、粉碎しつくし、大衆路線の観点を貫徹していきたいと思ふのみです。そうすることが、彼らの「怨」と私自身との隔たりを縮める唯一の道ではないかと思えます。

「チン」資本と「行政」の墮落

昨年末の株主総会（一株主運動で会社側は大きな会場でやらざるを得なかつた訳だが）において、会社側は、一方的に決算のみで結着をつけようと、水俣病患者のことなど眼中にはなく（あるとすればとんだやっかい者ができてしまったということだらう）、又そのような会社側を一生懸命守ろうとする、政府ある

いは、地方行政は、絶体批判されなければならぬと思えます。患者に対する見舞金の際、契約書がとりかわされています。契約書ということと事体、ふざけた話だと思えますが、その中に「今後水俣病の原因が会社側であると判明した場合、一さいの責任は問わない」という類のものがありますが、会社側は、全てこのように患者側に対応してきています。もちろんそのようなものを受け入れざるを得なかつた患者側の深刻さを考えなければならぬと思えますが、絶体に、万余の大衆の面前でもつて、会社側を、粉碎しつくさなければならぬと思えます。水俣病患者の正式？な認定患者は、現在一三〇人近くで、死亡者は、ほぼ、五〇人となつていようです。しかし、水俣周辺には、認定患者以外の人達が多く存在しているということは常識のことのようになっています。現に認定患者でない人の毛髪から認定患者と同じぐらいの量のメチル水銀が出ているといわれています。このような状態に対し、政府厚生省は、周辺地域住民の健康調査すらおざりにし、公害防止法においては、明白に企業優先のいわゆるザル法の制定を行っています。更に又、資本は増々石油産業、原子力産業と様々な産業、工場を日本各地に誘致し、外国にまで手をのばそうとしています。このように、政府と資本が一体となつて、公害あるいは公害病を全く無視（公害防止法など全くのスタンダードプレーにすぎない）してきているのに対し、私達は決してスキをみせてはならないと思ふ。例えば、東京都などにおいては、自動車の排気ガス、騒音などももう常識のようになり、あたかもそれが、日常生活に欠かせない？もののように慢性的になつてはいないだらうか？私達は最低限、自分達のほんの身の回りのこ

などを、精密に分析し、政治工作活動を日常不断に追求しなければならぬと思う。なぜなら、労働者大衆にとって一番問題なのは自らの生活そのものだと思う。よく日本の経済構造のことを二重構造と呼ばれているように、最低辺にいけばいくほど、労働者大衆にとっての生活の問題が存在しているのではないだろうか？

1でも言ったように、最上段から、帝国主義云々と、叫び、何故労働者は決起しないのだろうと嘆くことより、実際の労働者の生活を調査することから始めるべきだと思う。その為には、学者気とりとかインテリの体質は改めなければならぬと思う。私はどうしようもないブチブルだと思っています。改めようと思っています。

最後に、スローガンの「水俣」を見て思ったことを書いてみます。

・「水俣」を許せない問題だと思った諸君！
共に才一歩から始めよう！

・同情的なものでは、解決されないと考えている諸君！
自らも同情される者になろう！

・自分をブチブルだと思っている諸君！
ブチブル思想を自分の手で破壊しよう！

・プロレタリア思想で武装しよう！
労働者大衆と結びつこう！

◇ 編集後記 ◇

「あいりん地区では、労働者の権利獲得運動とともに、同地区を反権力斗争の拠点にしようと、万国博開幕前後から、新左翼系の学生らが潜入し「釜ヶ崎解放戦線」などを結成。全港湾西成分会などとの接触をめざしていた。」六月一日 朝日新聞朝刊

新しい芽が出ています。それは私達の仲間が新聞に出ているとかの問題ではなく底辺の人民が五日間に渡って暴動を起こしたことです。権力に対する正しい解決の方法を人民が学びつつあるようです。南大阪の諸君の正しい方向を支持します。白ヘルの「首都をコサ暴動に！」など問題になりません。「中間潮流」の時代は終わった感が強いです。

全国に釜ヶ崎のような闘いを創り上げよう！

「長征」は二ヶ月に一回の発行予定です。まだまだ趣旨を説明しつくすことはできませんが、みなさんの闘いの教訓を是非お寄せ下さい。

次号には「斗争の教訓」を更に内容豊かにしていきたいと思えます。

資本との持久的な闘いから労働運動の一視点を確立しようと思張っています。地域住民運動からの教訓も載せていきたいと思えます。

長 征

第2号
¥250

発行日 1971年 6月 21日

発行者 日本マルクス・レーニン主義者同盟
労働者組織委員会

連絡先 東京都大田区大森西3-30-9
栗田荘 西本 勝気付
TEL (03)763-5759

レボリューション社取扱出版物

NET 1970. 1. 18 ~

(第2分冊, 現象でなく本質を!) NET全労闘 ¥200

砦〈合本〉

——— 麴町中学全学共闘会議機関誌 ¥120

中村君虐殺糾弾

——— 中村君虐殺糾弾委員会 ¥200

北富士闘争

——— 北富士闘争連絡会 創刊号~3号 各¥100

石川青年の陳述の記録

——— 狭山差別徹底糾弾支持共闘会議 ¥200

三里塚砦の子供達

——— 連合報道社 創刊号~3号 ¥100・150・200

九州の烈火

——— 全九州解放戦線救対部 ¥50

出撃

——— 南部地区解放戦線機関誌 ¥30

長 征

創刊号 1971. 4

1. 人民の中へ！ 労働者の中へ！
2. 職場闘争報告
砂糖 港湾 マスコミ労働者他
3. 労働運動資料
特集 労働組合法令集
4. 中国共産党 パリ・コンミュン百周年記念論文
日本マルクス・レーニン主義者同盟 労働者組織委員会

¥250